

平成27年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進地域】

番号	10	都道府県市名	群馬県
----	----	--------	-----

1 推進地域における学力に関する現状

群馬県内の高校生の学力の状況を、群馬県公立高等学校入学者選抜学力検査結果をもとに分析すると、国語を除く全ての教科において、上位層と下位層が分かれる得点分布が見られる。平成27年度入学者選抜学力検査結果の英語においては、平均点が45.0点のところ15点～19点に下位層が大きく形成され、学力の差が顕著に現れた。高校に入学する段階で、中学校での学習内容が定着しておらず、学習意欲が乏しい生徒が相当数存在することが推察できる。

こうした課題に対応するため、群馬県教育委員会では、平成25年度から平成27年度の3カ年にわたり、下位層の生徒が多く学力定着に課題が見られる県立桐生西高校と県立下仁田高校を、文部科学省「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（高等学校）」推進校に指定し、つまずきやすい学習内容の確実な習得や知識・技能を活用する授業の展開に向けた工夫改善、学習意欲の伸長、学習習慣の定着など、確かな学力の育成に資する実践研究を推進するとともに、全ての県立高校等にその成果の普及を図ってきた。

推進校における平成25年度及び平成26年度の研究課題は次のとおりである。

【県立桐生西高校】

平成25年度：「基礎学力定着のための授業改善の研究～生徒の実態に応じた教材開発と言語活動の充実～」

平成26年度：「生徒の地平に立った新しい授業観にもとづく授業改善の研究～学び合い活動（協働学習）による言語活動の充実と評価の工夫～」

【県立下仁田高校】

平成25年度：「言語活動を充実させ、コミュニケーション能力や基礎学力を向上させる研究～学び直しの学習活動や生徒同士の学び合い活動を通して～」

平成26年度：「基礎学力の向上を目指した授業づくりの研究～学び直し学習、学び合い学習の実践を通して～」

上記研究課題に基づく調査研究の結果、平成25年度においては、グループ学習を取り入れて言語活動を充実させた授業を実施することが、生徒の思考力・判断力・表現力に影響を与え、定期テストや授業評価アンケート等でも成果が現れた。また、平成26年度においては、グループ学習を取り入れて言語活動を充実させた授業や基礎基本を復習する内容を取り入れた授業を実施することで、従来の講義形式による学習指導では見られなかった主体的な授業姿勢が生徒に見られるとともに、授業アンケートでも授業に対して肯定的な評価をする生徒が増加した。一方、次の点が、課題として平成27年度に引き継がれることとなった。

【県立桐生西高等学校】

- ・教師の協働によって「教育的観察力」、「省察力」を高めること。
- ・生徒が「学ぶ意欲」を持続できるように「主体的に学ぶ姿勢」を育てること。

【県立下仁田高等学校】

- ・学び直し学習の在り方。
- ・本校生徒の実態に即した学び合い学習の在り方

2 平成27年度の重点課題

推進校において、グループ学習などの協働学習を充実させ、社会において困難な課題に直面しても、その解決に向けて、他者と協働して取り組むことのできる人間関係形成能力や課題解決能力の育成を目指す。また、生徒同士による学び合いを推進することにより、学習意欲に乏しく、学習習慣に課題がみられる生徒等の学習意欲の喚起、義務教育段階での学習内容の確実な定着、思考力・判断力・表現力の育成等に取り組むとともに、自ら主体的に学び続けることのできる力を身に付けさせる。更に、グループ学習（協働学習）や学び直し学習の推進などをテーマとした組織的な授業改善研究等（「群馬県高校生ステップアップサポート事業」）を全ての県立高校等を対象として行い、生徒が主体的・協働的に取り組める課題解決型の授業展開を推進し、組織的に研究授業や授業研究等の校内研修を実施して教員の専門性を高める。

3 研究の内容

調査研究を円滑に行うための推進地域の体制としては、事業の円滑な実施と今後の実践研究の推進や成果等の検証・普及のために必要な指導・助言を行うことを目的として、推進協議会の設置要綱を定め、次のとおり、7名の委員で学力向上推進協議会を構成した。推進校においては、主担当及び副担当を含めた校内委員を設け、組織的に調査研究に当たるよう指導した。

【学力向上推進協議会委員（7名）】

濱田秀行（群馬大学准教授）、山口政夫（群馬県教育委員会事務局高校教育課長）、佐田穰太郎（県立桐生西高校長）、狩野清美（県立下仁田高校長）、武井一茂（県立前橋西高校長）、野村聡（県立桐生女子高校長）、町田仁（県立藤岡中央高校長）

推進地域の支援としては、平成27年6月12日（金）に第1回推進協議会を群馬県庁で開催し、推進地域、推進校それぞれから、平成27年度の取組内容等について説明するとともに、推進校間の情報交換を行い、学力向上推進協議会委員から、グループ学習及び学び直し学習のポイントや校内体制づくりなどについて助言した。また、濱田委員から事業推進のポイント等について講演していただいた。また、平成28年1月12日（火）には、県立桐生西高校において第2回推進協議会を開催し、公開授業（4限の授業を全て公開）、公開研究授業（国語・理科）及び研究協議会を行った。協議会当日は、県内外の高校等から78名が参加し、熱心な授業参観と協議が行われた。平成28年2月2日（火）には、県立下仁田高校において第3回推進協議会を開催し、公開授業（4限の授業を全て公開）、公開研究授業（数学・英語）及び研究協議会を行った。当日は、県内の高校等から70名が参加し、熱心な授業参観と協議が行われた。第2回及び第3回推進協議会ともに、推進校の取組の成果を広く普及させるとともに、推進校の調査研究の充実に資する内容となった。更に、「群馬県高校生ステップアップサポート事業」の一環として、平成28年5月12日（火）及び平成28年1月20日（水）の2回にわたり、全ての県立高校等を対象とした校内研修研究協議会を開催し、各校における授業改善の推進等に係る研修を行った。

4 研究成果等の把握と検証

県立桐生西高校においては、生徒を対象とした授業アンケート等を行い、学習に対する満足感・達成感や意欲・自己肯定感の変容等について客観的に数値化することにより検証を行った。また、職員を対象として、生徒の変容や授業観の変容などについての調査・分析を行った。県立下仁田高校においては、生徒を対象とした学習自己評価カード結果を数値化することにより、学び直し学習や学び合い学習等についての検証を行った。

推進地域としては、推進校で開催する公開研究授業や研究協議等の内容から、各推進校における成果や課題を把握するとともに、参加者へのアンケート等を、取組状況や調査研究全般に対する外部評価として活用した。

推進校における調査研究の成果は、学習面だけでなく生活面でも生徒の変容をもたらした。下の表は、推進校における生徒指導関係データをまとめたものである。

学校名	桐生西高校			下仁田高校		
	H25	H26	H27	H25	H26	H27
欠席率	2.7%	3.5%	3.1%	5.1%	4.2%	3.4%
遅刻率	2.9%	3.9%	2.7%	1.9%	1.8%	1.7%
特別指導件数	35件	73件	28件	37件	11件	4件
中途退学者数	12人	21人	4人	10人	3人	2人

※ H27の数值は2月末現在

県立桐生西高校においては、調査研究を行った3年間で中途退学者数が大きく減少しただけでなく、遅刻率や特別指導件数においても改善が見られた。県立下仁田高校においては、全ての項目において改善が見られ、特に、特別指導件数及び中途退学者数において、大幅な減少が見られた。推進校の調査研究における、ペア学習やグループ学習などを通じた人間関係づくりや魅力ある授業づくりの成果であると推察できる。

5 推進地域における研究成果等の活用

群馬県教育委員会では、生徒が主体的・協働的に取り組める課題解決型の授業展開を推進し、組織的に研究授業や授業研究等の校内研修を実施して教員の専門性を高めることなどを目的として、従前より行っていた授業改善推進の取組を見直し、平成27年度から「群馬県高校生ステップアップサポート事業」を全ての県立高校等を対象として開始した。

「群馬県高校生ステップアップサポート事業」では、全ての県立高校等が取り組む「組織的授業改善研究」と県立桐生西高校及び県立下仁田高校による、文部科学省「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」における調査研究の2つをもって構成される。「学習ルールの定着」、「学習目的の理解」、「学習方法の多面化」、「社会参画力の育成」の「学習指導の4つの柱」を重点指導事項として位置付け、学校全体で組織的・計画的な授業改善を実施することとした。「組織的授業改善研究」では、校内研修推進コーディネーター（各校1名）を設け、組織的な研究授業や授業研究会、全員が参加する校内研修会、生徒による授業アンケート等を実施するなどして、事業の推進を図った。

各校は、共通テーマ「知識・技能を活用した言語活動の充実について」、「協働的な学習（学び合い学習）について」に基づく取組を行うとともに、選択テーマ「学力定着に課題のある生徒に対する支援について」、「学び直し学習の効果的な進め方について」、「ICTを活用した効果的な指導について」、「知的好奇心を喚起する教材の開発について」の中から、生徒の実態に合ったテーマを選び、年間を通じた実践に取り組んだ。

来年度以降については、「群馬県高校生ステップアップサポート事業」における各校の取組に差が見られるなどの課題があることから、引き続き、教職員の理解を深めるとともに、県立桐生西高校と県立下仁田高校の調査研究の成果を生かしながら、事業の推進を図りたい。

6 その他

特になし。

平成 27 年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（高等学校）」
委託業務報告書（平成 27 年度）【推進校（学校）】

番号	10	都道府県市名	群馬県
----	----	--------	-----

1 学校の概要

<生徒数・学級数(平成 27 年 4 月 1 日現在)>

学校名	ぐんまけんりつきりゆうにしこうとうがっこう 群馬県立桐生西高等学校				
学 年	1 年	2 年	3 年	計	教員数
学級数	4	4	4	12	30
生徒数	155	146	138	439	
学校のホームページアドレス		http://www.gsn.ed.jp/gakko/kou/kirinisi/			

2 推進校における学力に関する現状

本校は、創立 36 年目を迎える群馬県東毛地域の全日制普通科の高等学校である。平成 26 年度卒業生の進路状況は、進学 59.0%（大学 7.7%、短大 5.8%、専修・各種 45.5%）就職 31.4%、その他 9.6%である。

過去 3 年間の入学者選抜学力検査結果からみた本校生徒の学力は、県全体の平均点より低い状態が続いている。特に、数学や英語では大きく差がついている。本校に入学してくる生徒の生育史、学習経験には種々の困難と問題があり、学力の定着に多くの課題を抱えている。このような現状を踏まえ、ここ数年基礎学力の定着を目標に据えて各教科で授業改善を図っているが、自己肯定感を持たず、学習意欲に欠ける生徒は、入学時の学力がピークで、その後は下降の一途をたどり、学びからの逃走に歯止めをかけることができていない。

平成 25 年度から国語、英語、数学を中心に 26 年度は地歴でも協働学習に取り組み始めた。この取組を通して、生徒の学習活動を観る視点を変え、生徒の地平に立ち、生徒の抱える困難さを読み解き、授業改革を進めなければならないということが明らかになった。この共通認識を踏まえ、現在「研究授業・授業研究協議会」、「教科研究会」、「研修会」を重ね、生徒が主体的に学び学習意欲を互いに高め合う「協働学習」の充実発展に努めているところである。

3 研究課題

教師の協働によって「教育的観察力」「省察力」を高め、生徒が「主体的に学ぶ姿勢」を育てるために必要な具体的実践的な支援の方略について

4 平成 27 年度の重点課題

(1) 目標

- 本校の生徒は高校生活で自らの居場所を見出し、学びを定着させていく上で教師の多くの支援を必要としているとの認識が職員間で徐々に広がりつつある。定例化された「研究授業・授業研究協議会」、「教科研究会」、「研修会」での協議によって職員間で生徒の抱える問題の共有ができるようになってきたことの現れだと思われるが、まだ十分であるとは言えない。「問題」とされる行動や、不適応行動などに込められている生徒固有の「意味」を読み解き、職員でその「意味」の読解を交流し合い、協働によってよりよい支援の道筋を見出し、具体的な実践へと結びつける。

- 「授業アンケート」（生徒対象）の結果でも明らかになった問題点、「授業以前の課題」に対する取組（「始業時間を守る」ことや「授業に集中できる環境」などの）授業を成り立たせる基盤を確立しなければならない。また授業中の生徒の「学びの作法」を3年間で段階的に指導し、「主体的に学ぶ姿勢」を身に付けられるようにする。

5 研究の具体的内容

- 定例化された「研究授業・授業研究協議会」、「教科研究会」、「研修会」での協議を通して、教師の協働により以下の力を高める。

◎教師の協働によって高めたい力

①生徒の姿を丁寧に見取る力

- 生徒の教室における事実から、生徒の既有知識や発達課題を見取る力
- さまざまな生徒の変容を見取る力
- 生徒の背景にある固有の生育史や学習経験を見取る力
- 教師の行動が生徒の教材理解にどう関わっているかを見取る力
- 生徒の理解に沿って授業が進められているかを見取る力

②生徒の姿から見取ったことを踏まえて実践の具体的方略を構築する力

- 「主体的に学ぶ姿勢」を育てるために必要な支援の多面的なアプローチ

- ①多様な学習形態（一斉授業・少人数・「協働学習」等）で学べるように（聴く・話し合う・書きとめる・発表する・まとめる・振り返る）ための具体的な支援
- ②教材（教科書・副読本・ノート・プリント等）を学びに生かせるように（読み取る・検索する・保存する・参照する）ための具体的な支援
- ③人との互恵的なかわりができるように（わからないところを訊く・わかるように伝える・他者の考えを聴く・互いに意見を交流する）ための具体的な支援

- 生徒が主体的に学べるように、各教科の特性を生かしながら、どの教科においても、ペア学習・グループ学習・問題解決的学習・学び合い学習等を取り入れ、積極的に学習方法の工夫改善を行う。生徒の学ぶ意欲がより力づけられるような評価方法について、テストのやり方や学習の評価方法について改善を行う。

- 平成27年度研究のスケジュール

	期 日	具体的な内容（公開授業、職員研修、アンケート実施等）
学校 全体	4月20日（月）～ 4月24日（金）	○第1回授業公開週間：すべての授業を公開し、生徒の学びの様子を見取り問題点を共有する。一学年を中心に
学校 全体	5月11日（月）～ 5月15日（金）	○第2回授業公開週間：すべての授業を公開し、生徒の学びの様子を見取り問題点を共有する。
学校 全体	5月13日（水）	◎第1回研究授業：各学年1クラス⑤時間目に研究授業⑥時間目に各学年で研究協議会
教科	5月20日（水）	○第1回教科会議：第1回研究授業の振り返り
学校 全体	6月8日（月）～ 6月12日（金）	○第3回授業公開週間：すべての授業を公開し、生徒の学びの様子を見取り問題点を共有する。
教科	6月22日（月）	○第2回教科会議：第2回研究授業の振り返り
学校 全体	7月11日（火）	○研修会：埼玉県立新座高等学校視察報告
学校 全体	7月15日（水）	○第1回「生徒授業アンケート」

学校 全体	7月 30日 (木)	*公開研修会：「協働学習の実践例」 県外講師：大槻正先生（滋賀県立草津高校）
学校 全体	9月 7日 (月)～ 9月11日 (金)	○第4回授業公開週間：すべての授業を公開し、生徒の学びの様子を見取り問題点を共有する。
学校 全体	9月 7日 (月)	◎第2回研究授業：各学年 1 クラス⑤時間目に研究授業⑥時間目に各学年で研究協議会 指導・助言；外部講師：草川剛人（帝京大学）
学校 全体	10月14日 (水)	*合同研修会：桐西・安中総合高校合同研修会 指導・助言；外部講師：濱田秀行（群馬大学）
学校 全体	11月 9日 (月)～ 11月13日 (金)	○第5回授業公開週間：すべての授業を公開し、生徒の学びの様子を見取り問題点を共有する。
学校 全体	11月 6日 (金)	◎第3回研究授業：各学年 1 クラス⑤時間目に研究授業⑥時間目に各学年で研究協議会 指導・助言；外部講師：濱田秀行（群馬大学）
学校 全体	12月 7日 (月)	※ 文科省視学官訪問 研究授業・授業研究協議会
学校 全体	12月21日 (月)	○第2回「生徒授業アンケート」（1年）
学校 全体	1月12日 (火)	○第2回教科会議：第2回推進会議 全県公開授業・研究協議会 指導・助言；外部講師：濱田秀行（群馬大学）
学校 全体	1月18日 (月)～ 1月22日 (金)	○第7回授業公開週間：すべての授業を公開し、生徒の学びの様子を見取り問題点を共有する。
学校 全体	1月19日 (火)	◎第3回教科研究会 3年間の取り組みの振り返り
	2月17日 (水)	○平成27年度学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究連絡協議会；国立オリンピック青少年センター
学校 全体	3月 4日 (金)	○平成25～27年度事業のまとめと来年度の取り組みについて

6 研究の成果

○ 定例化された「研究授業・授業研究協議会」、「教科研究会」、「研修会」の成果

I、 職員アンケート結果（自由記述）※変容が認められる記述

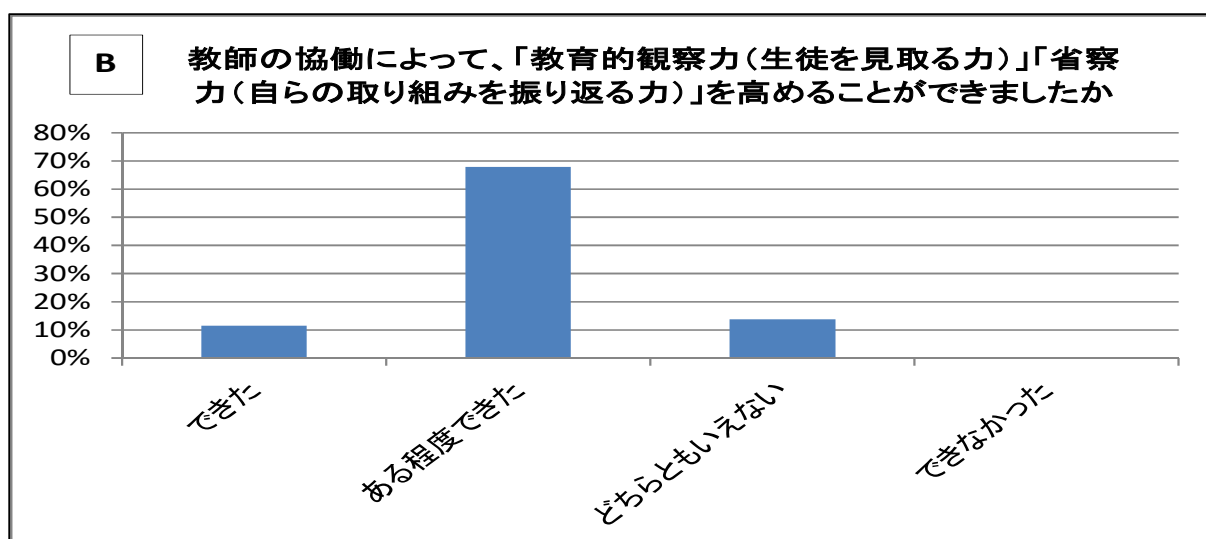
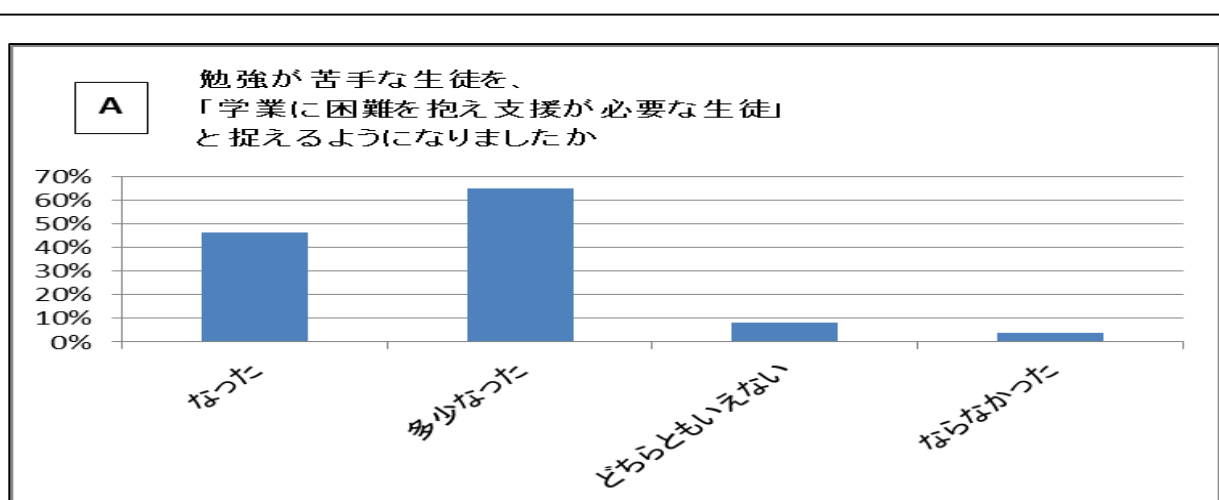
3年間の取り組みで変化したこと				
	△生徒の状況	△授業観	△授業実践	△その他
国 語 科	協働について ・生徒の机の移動の難しさがなくなってきた ・生徒の協働の <u>取組に対し拒否感がなくなってきた</u> ・机の密着感がよかった(1年生) ・生徒の <u>落ち着いた雰囲気</u> が形成されている ・深みのある活動ができたのかどうかはわからないが、他者との関係を少しずつ築くことができている。	・1時間の中でテーマを絞ればやりやすくなる。 ・従来の方法ではダメではないかという追い詰められた感があった。そのため、協働によって授業を進めていかなくてはという強い気持ちではないか。 ・グループの数は少	・教科書を教えていくことをメインに考えるのではなく、 <u>どのようなことに生徒を取り組ませて、どのような力をつけたいのかという根本的な問いかけが</u> 教員の側に必要ではないか。 ・(実際のところどれだけ考えることがなされたのかは自信が無いが) 実践国語の	

	<p>少しずつではあるが最初の段階から変化していくことができているのではないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>他者と関わることが苦手な生徒も、他人の発表などはよく聞く。</u>他者への関心のある証拠ではないか。授業の中で他者と積極的に関われないまでも、<u>それを聞く、見ることで協働の意識付け</u>にはなるかもしれない。 ・授業をかき回す(突出して目立つ)生徒と真面目に静かな生徒の温度差をいかに埋めるのか。かき回す生徒は自分が切り捨てられたくないから目立つのではないか。<u>そうした生徒をいかに参加させていくのか</u>は課題である。 ・規律と作法(規律には排除を前提とした意識がある。<u>作法は、できないことからできるように洗練していく意識</u>である。)全てを見とるためには作法として、身につけさせていく意識が持てるように。 	<p>ない方が目が届きやすい。40人の10グループはこちらの生徒把握も難しくなるのではないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師がグループに入って説明するよりも、友人たちから教えて貰う方がよく聞いている。問題意識が同じなのではないか。 	<p>中で、<u>比較的自由にテーマを絞って教材をつなげることができたのでよかったか</u>と思う。</p>	
英語科	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>男女が仲良くなった。市松模様の座席の効果</u>もあり、ペアワークも男女で出来るようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ほかの先生の授業を見て、<u>自分の授業の時と生徒の様子がどのように違うか</u>を見る。 ・協働学習の授業では<u>どのように評価をして行くか</u>が課題。(テストはどうしていくか・・・) 	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数クラスでは協働学習がやりやすい。40人のクラスでは目が行き届かない。 	
社会科	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>与える課題に工夫が必要</u> → 課題によっては生徒の取り組み方が悪かった ・3年生に関して、進路が決まった後の授業に対する 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業で扱うテーマによっては、協働学習を取り入れる必要性 ・知識として抑える 	<ul style="list-style-type: none"> ・学期に一回程度取り入れた。ディベートのような事にもチャレンジしてみたかった。 ・頻繁に取り入れた。 	

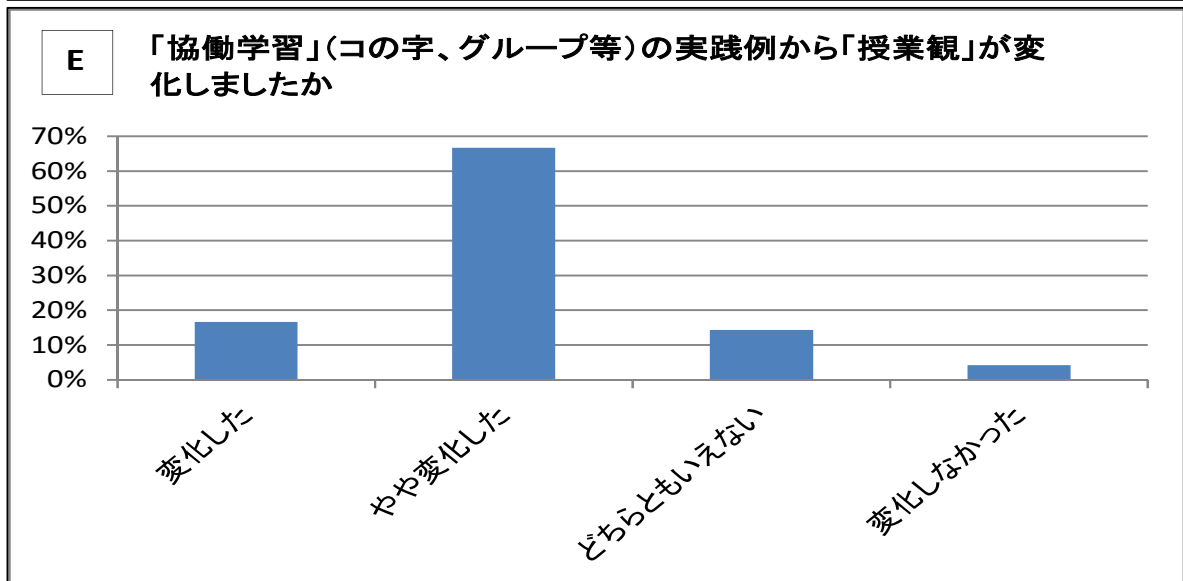
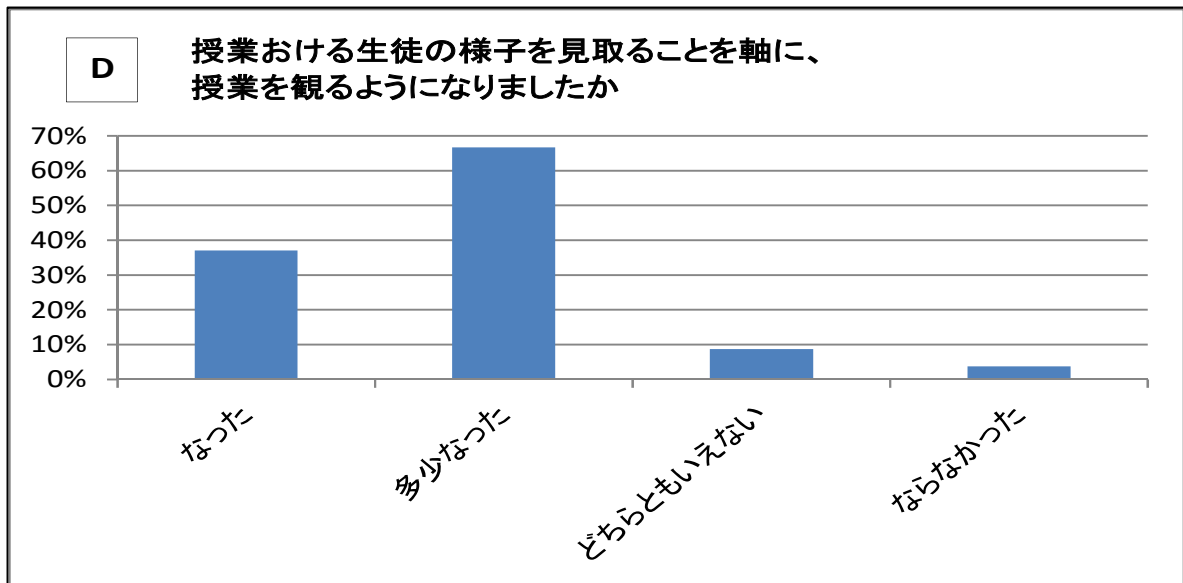
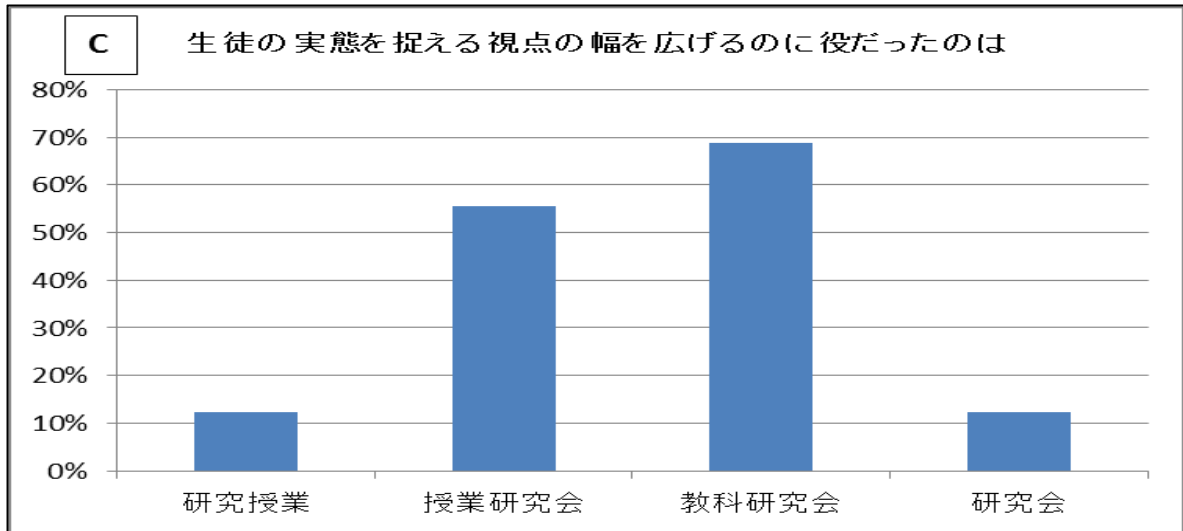
	<p>姿勢やモチベーションが低かった</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒が課題に取り組むまでに時間を要する（10～15分） 	<p>べき所は抑えた方が良い</p> <ul style="list-style-type: none"> 協働学習と一斉授業のバランスを考える 	<p>考えさせる時間と話し合う時間を半々程度。</p>	
理科	<ul style="list-style-type: none"> 3年間を通してみると変化していない。3年生は1年の時より学習意欲が低下している。 生徒自体が成績を良くしよう、態度良くすごそうと思っていない。 <u>やりがいのある進路目標</u>を設定する必要性を感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> 楽しいことは、生徒はのってくるが、それ以外はやる気がない。 研修で講師の方が話されていた、生徒が自ら結論を求め、正解を導き出すというのは、実際どのように取り組んでいけば良いか。 <u>板書を書かせるだけでなく感想を自分で考えて書かせ、さらにそれを相互評価するという取り組み</u>をした。白紙ではなく、文章をいろいろと良く書いている。 	<ul style="list-style-type: none"> 前任校ではやらなかったグループ学習に取り組んだ。 協働学習に取り組んだ。しかし、途中で挫折。 	<ul style="list-style-type: none"> 選択科目自体の存在意義を問う必要がある。進路実現のためのものか。少人数にするだけのものならクラスごとで授業を受けさせた方が良いと思う場面もある。 選択科目自体に進路希望実現への結びつきがない。
保健体育科	<ul style="list-style-type: none"> <u>男女間（横）のつながりが良好</u>になった。 <u>授業に参加する生徒が増えた</u>。 グループで話し合い、学び合うことに慣れてきた。 問題を抱えている生徒はそれを自分の中にとどめてしまう傾向がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 「<u>教える</u>」から「<u>引き出す</u>」スタイルへと変化。 授業の捉え方が変わった。 教員→生徒より、<u>生徒→生徒の方がより深い学びにつながる</u>ことに気付いた。 	<ul style="list-style-type: none"> ある程度抽象的な（<u>少し悩み、色々な捉え方ができるような</u>）<u>発問</u>に気を掛けることが多くなった。また、グループワークを多く取り入れ、<u>生徒をよく観察するよう</u>になった。 グループワークを取り入れることで、<u>生徒に主体性が芽生えた</u>。 <u>話し合い活動、振り返りの場を意識して</u>行うようになった。 <u>自ら考えるような質問で、自由に発言できるような取り組み</u>をした。（答えの 	

			幅を広く取り、「間違えた」という気持ちにさせない)	
数 学 科	<ul style="list-style-type: none"> 元々の学年の雰囲気が強 く協働学習等によって変化 したかどうかは比べ辛い。 3年生を見ると様々な学 習の仕方、形式に対応でき つつある。(誰かに聞いた り、発表したり) 寝る生徒が減った 	<ul style="list-style-type: none"> グループ学習が1 つの手段としてあ る。(アプローチ方 法が増えた) 数学は分野によっ て一斉かグルー プかで定着させやす い。学習方法が分か れる。 濱田先生の話がそ の気にさせる 		<ul style="list-style-type: none"> グループでも一斉 でもどちらでも対 応出来るようになって ほしい。 学びたいと思う意 欲を持ってほしい が…。持たせるよう に出来たかどうか 人間関係の形成が 苦手

Ⅱ、職員の意識がどのように変容していったか 職員アンケート結果 A ~ H



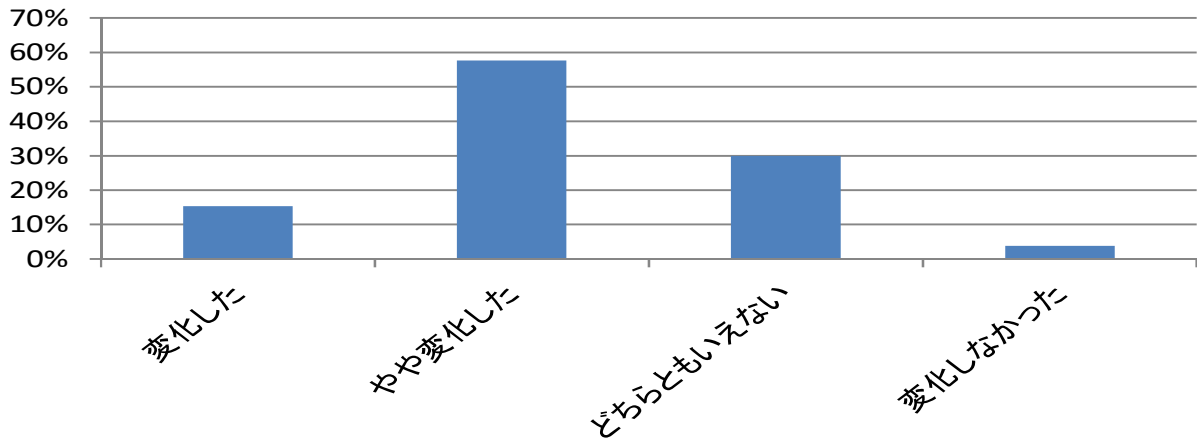
授業を成り立たせるとの困難さを、生徒の基礎的な学力の定着度の低さや学習意欲の欠如に求めがちであったが、生徒の地平に立ち、個々の生徒が抱える困難さを読み解くことに協働して取り組めるようになった。



「協働学習」の実践例から、授業において生徒の活動を中心に観られるようになり、生徒の多面的な面を捉えられるようになったのは、職員が生徒の抱える課題を共有するために、「授業研究会」「教科研究会」を定例化したことの意義が大きい。

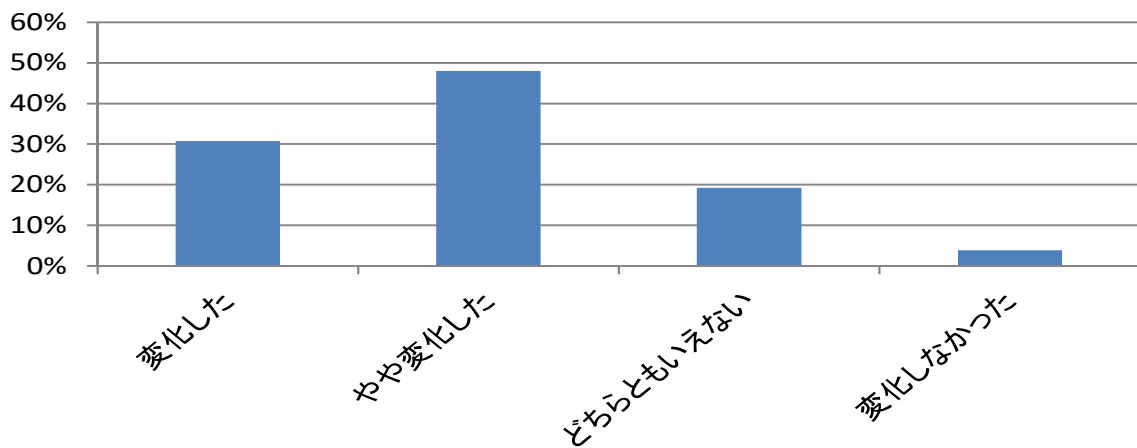
F

「研究授業・授業研究会」「教科研究会」での協議で
教材研究・授業に変化が出ましたか



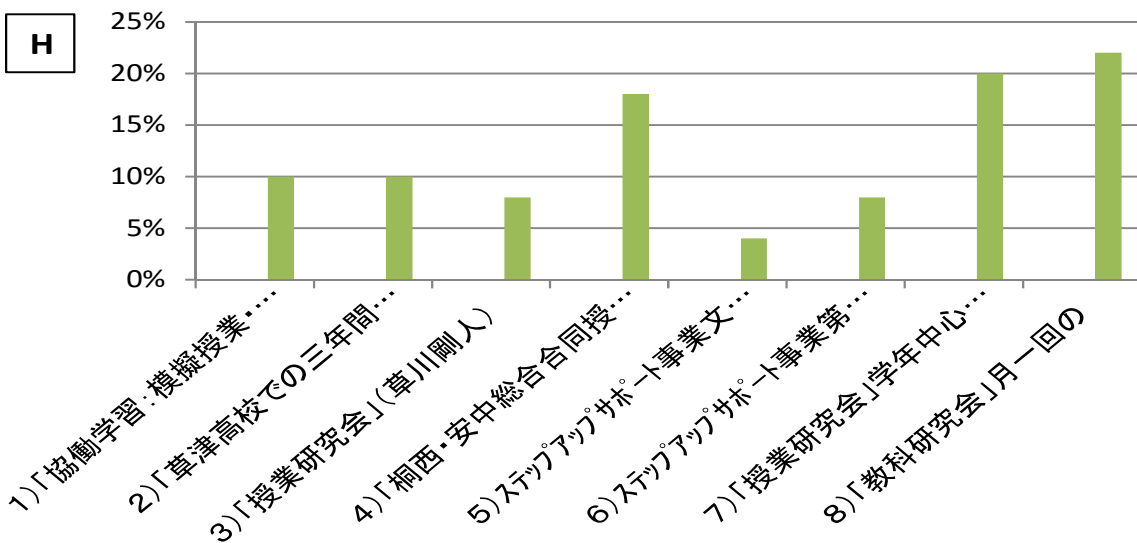
G

生徒が「学ぶ意欲」を持続し、「主体的に学ぶ姿勢」を育てるため
に、自分の授業が、従来のやり方と変化しましたか？



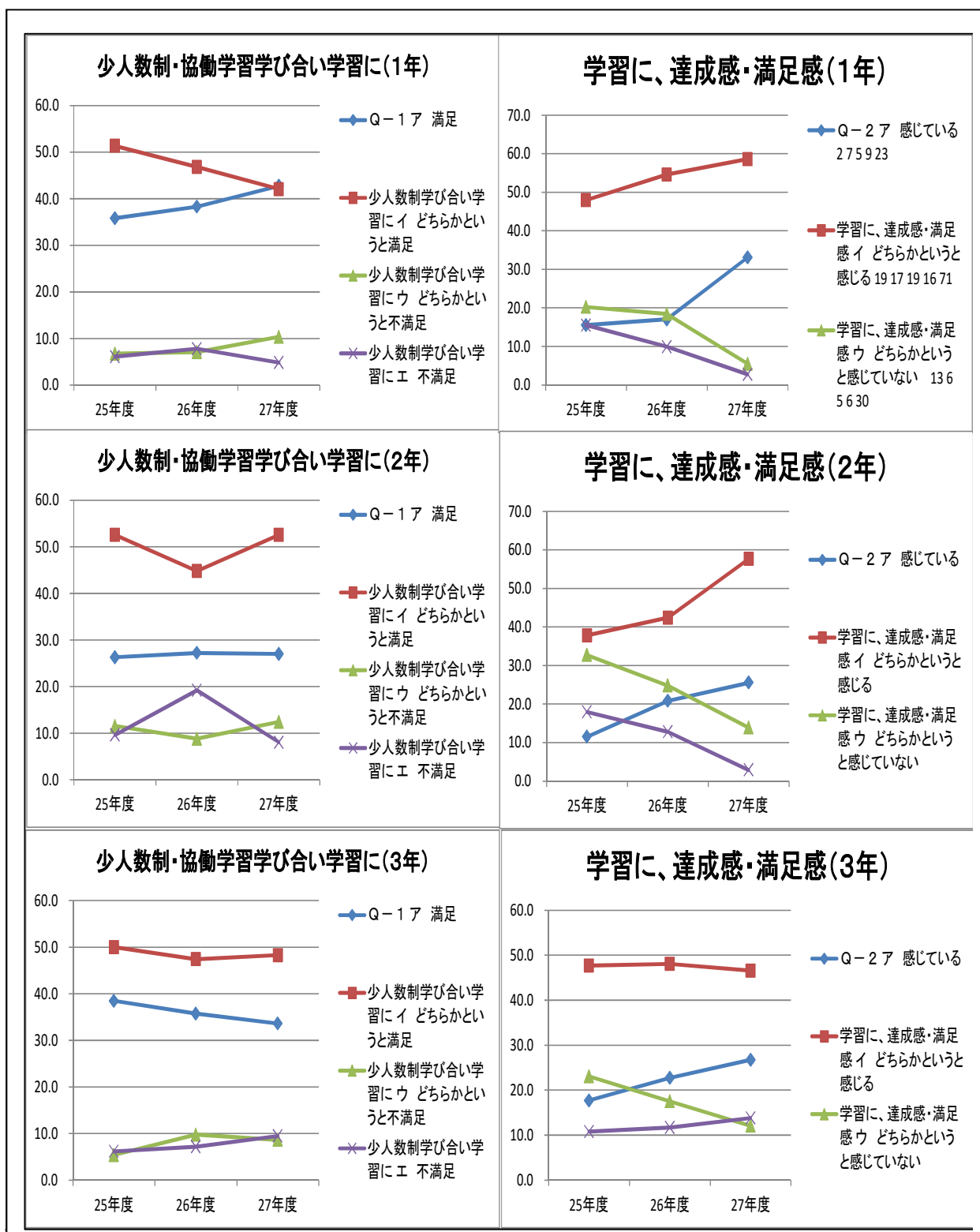
* 本年度の取り組みでよかったのは？

H



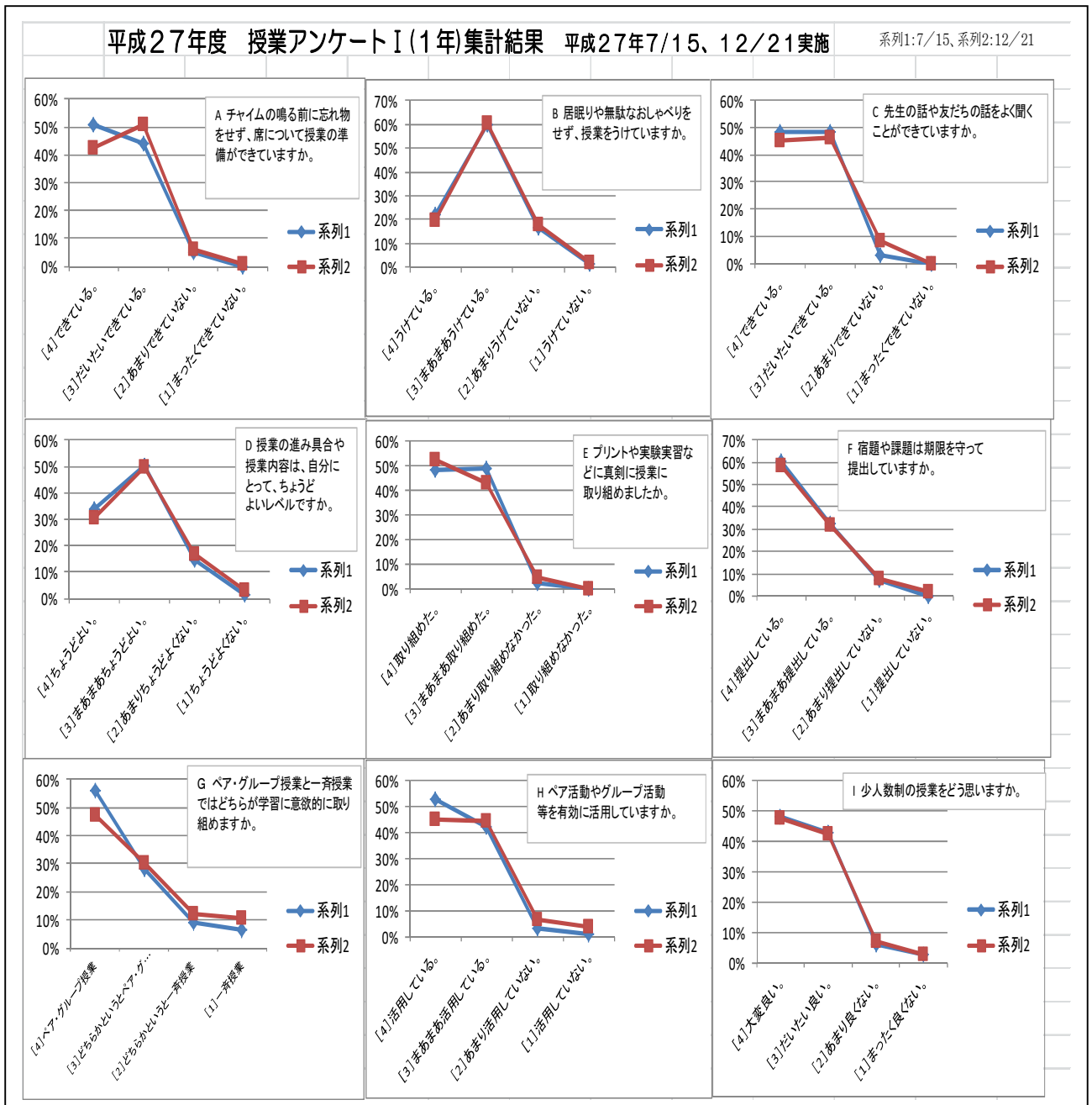
生徒の学ぶ意欲を喚起し、持続させるためにはどうすればよいか、というアプローチで授業の組立を考えるように意識が変化した。

生徒の学習評価アンケートに見る変容



少人数制・協働学習に対する満足度は、3カ年を通じて各学年高い水準を維持することが出来た。学習に対する達成度満足感もそれに依りて維持、向上させることが出来、少人数制・協働学習が生徒の学習満足感・意欲を高める有効な取り組みと考えられる。

一年生の授業アンケート結果に現れた特徴

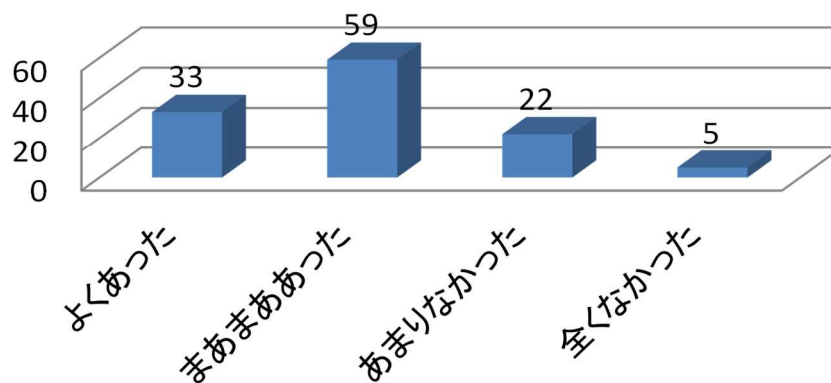


1回目のアンケートと2回目のアンケート結果に大きな開きが出ておらず、学習姿勢が大きく崩れることがなかった。このような結果が出たのは、以下の取り組みによる効果であると考えられる。平成27年度入学生は、入学時より各HRの教室の座席を男女で市松模様になるように配置し、国語、数学、英語で少人数編成の協働学習による取り組みを進めるとともに、他の教科やHR活動においても協働学習を意識してグループによる活動をすすめた。それによって、生徒が教室における自分の「居場所」を見つけ、生徒同士の交流によって安定した互恵的人間関係作りができた。一年での退学者が多い年では二けたになることもあったが、平成27年度3月1日現在退学者は0である。

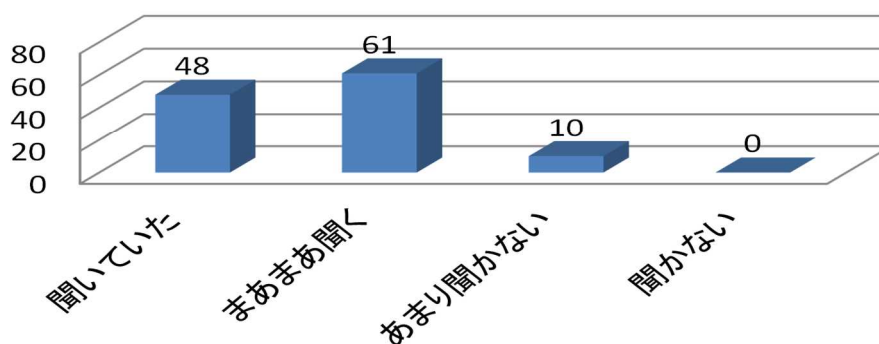
○「主体的に学ぶ姿勢」を育てるために必要な支援の多面的なアプローチ事例

3年生 「国語」における「協働学習」の振り返りアンケート結果 1～5

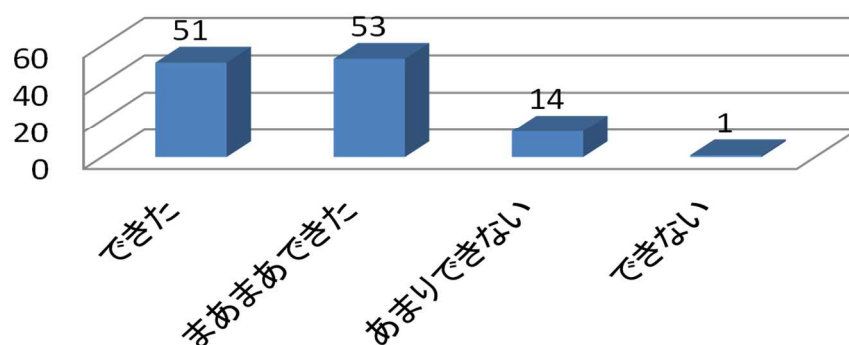
1. グループで課題に取り組むことで、一人で考えるときより意見が深められることがありましたか。



2. グループや個人で発表するとき、他の人の意見をよく聞いていましたか。

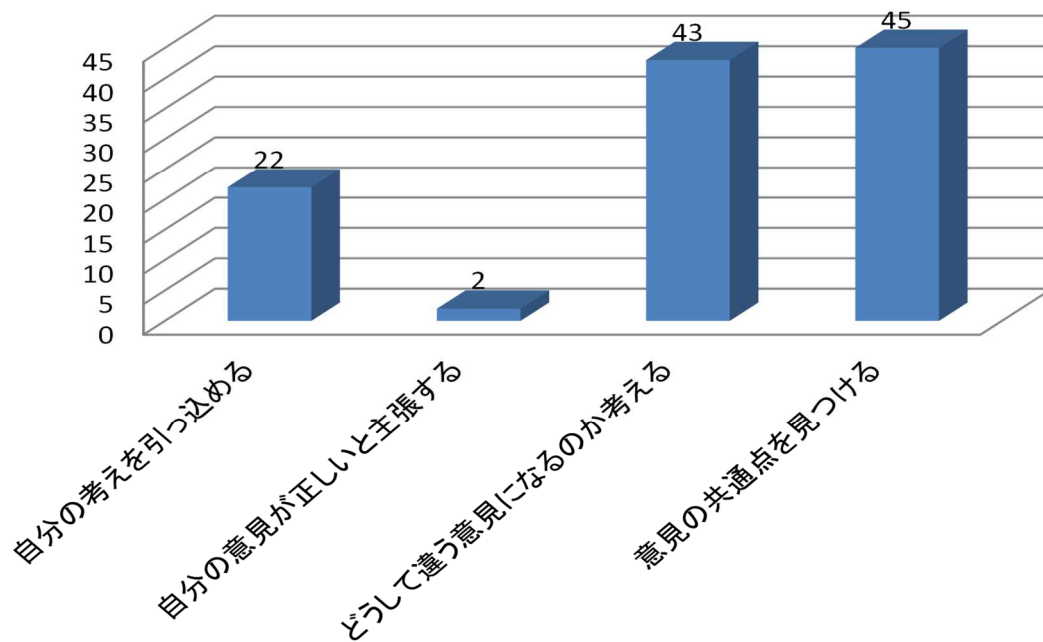


3. グループで学習する際に、分からないことや読めない字などグループで相談することはできましたか。

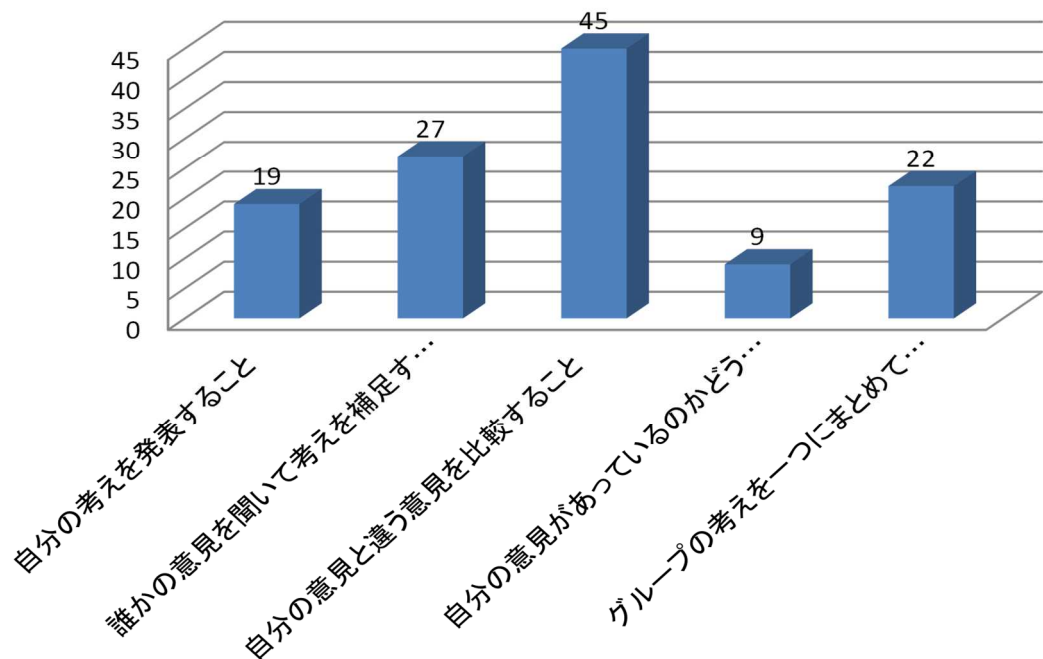


3年間の「協働学習」の積み上げにより、分からないことがあるときは、グループのメンバーに訊くことができ、他者が発表するときにはしっかり耳を傾けて、他者と意見を交流することで、自らの考えを深めることが出来るようになった。

4. グループの中で異なった意見がでたときどうしますか。



5. グループの学習を進める中で、一番意味のあることはどんなことだと思いますか。



グループの話し合いで、自分とは異なる意見が出たときその違いについて考えるとともに、自分の考えとの共通点を見つけようとし、相手の立場をより深く読み取ろうとする姿勢が生まれた。グループで話し合うことを通して、自分の考えと他者の意見の違いを比較し、他者の見解を取り入れて自分の考えをより発展させることを意義のあることだと捉えられるようになった。

県内公開研究授業・研究協議会 1月12日(月)での参観者からの感想・評価

国語科学習指導案「実践国語」

授業者 教諭 高橋 雅樹

1. 日時・使用教室 平成28年1月12日(火) 会議室

2. 学級と生徒の実態

3年1組34名のうち、物理選択でない30名(男子13名、女子17名)

学習に対して、比較的良好に取り組むことの出来る生徒の多い学級である。反面、学習に参加する意欲の低い生徒もいるため、学習に参加しようという雰囲気づくりに努めて行く必要がある。また、生徒の中には安易に解答を求めて、考えるという行為そのものの重要性を軽く見る傾向がある。他者の意見を確認しながら、自分の意見を補完し、深めていくという意識を持たせたい。

読解に関しては、作品の表現に即して、内容を汲み取ることができず、自分勝手な読み取りをする生徒もいる。学習活動の中で、教材文にそって考えると同時に、表現を読み味わえる工夫をしながら、自分の考えを引き出せるようにしたい。また、個々の読みを交流させたい場合でも、全体に向けて発言することができない。グループを利用することで、個々の発言を出しやすくしていくことを考えたい。

3. 単元名 詩の世界を深めよう(詩の表現を味わい、詩の世界を他者と共有しよう)

単元の目標

詩の表現について考え、表現を味わうとともに、作者の創作意図や心情について考えること。

【現代文B 内容(1)イ の項目に準ずる】

4. 教材について 教材「上り列車」(山之口 獏)

教科書に取り上げられている詩には限りがあり、作者についても数多く取り上げることはできない。さまざまな詩をできる限り読む機会を与える必要もあると考える。取り上げた詩は、前半部の兄の言葉から詩人山之口獏として生きようとする自分と山口重三郎という自分の姿が重なる面白さを感じることができる。また、後半の「旅は」以降、前半と趣きが大きく変わる。詩の題名「上り列車」と後半三行の内容的な変化が結びつくことによって、作者の思いだけでなく詩の世界も広がっていくように思われる。他者と詩の読みを重ね合わせることで、より深い詩の読みと鑑賞ができるのではないだろうか。

5. 本時の学習

(1) 本時の目標

詩についての読みをグループで共有し、表現の意味や詩の内容、雰囲気を読み味わい感想を書く。

(2) 準備 個人用プリント、グループワーク用の筆記用具と用紙・付箋紙、 掲示用「上り列車」本文、個人配布用本文

(3) 授業展開

	学習活動	指導上の留意点	言語活動等
導入	・本時の取り組みを確認する。	・板書することで、本時の取り組みをはっきりとさせておく。	

展開	<ul style="list-style-type: none"> ・「上り列車」という題名について考える。 ・詩の本文をグループで読み合い、いいなと思った箇所、気になった箇所、分からない箇所を考える。 ・各グループで出された詩についての読みをグループで再検討する。 ・グループごとに自分たちの読みを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どこに向かう列車なのか？誰が乗っているのか？など題名に関わる質問をし、詩についての興味を持てるように配慮する。 ・詩をグループ内で音読させ、詩についていいと思う〔好きな〕所、気になった所、分からない所を付箋紙に書いて、掲示した詩の本文の該当箇所に貼り出す。 ・詩についての読みを再検討できるように、貼りだした付箋を元にして質問をしていく。 ・グループごとに考えたことを発表して、他のグループとの読みを交流し合うように促す。また、発表の中で自分たちと違う考えであったり、参考にできそうな意見に気づいたらメモするように確認していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体で詩の題名について意見を交流する。（全体） ・グループで詩を読み合い、各自の読みを持つ。（グループ） ・グループで読みの再検討をし、結果を発表し合う。（グループ）
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・詩について気づいたことを感想としてまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者の考えから自分が気づいたこと、詩について分かったことをまとめていけるように指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自で感想をまとめる。（個人）

6. 評価の規準

関心・意欲・態度	詩について各自の読みを持ち、表現について考えようとする態度が見られたか。
読むこと	表現に注意して詩の本文を読み、各自の読みを共有し詩を読み深めることができたか。

◎県内公開研究授業【授業デザイン】

1 教科名・科目名 「実践国語」：3年1組 30名（男子13名、女子17名）

2 授業の目標・ねらい

- 詩の表現を味わい、
詩の表現について考え、表現を味わう、
作者の創作意図や心情について考え
詩の世界を他者と共有し
より深く詩の世界に分け入っていく

3 授業の特徴（工夫した点や特色）@課題の設定：生徒の疑問・関心を課題に

@可視化された生徒の課題が生徒を導く

@共有が読みの深化をもたらす

○「題名について考える」 *題名は答えでもあり探究すべき謎でもある

○〈いいなと思った所・気になった所〉《分からないところ》を考える。

*生徒の疑問・興味関心を縊り合わせ、主体的な取り組みを導き出す

○〈いいなと思った所・気になった所〉《分からないところ》を色分けした付箋紙に書いて、掲示してある本文の該当箇所に貼り出す。

*生徒の疑問・興味関心を可視化して共有する

4 実践のまとめ

（成果）

○読みに基づいた〈生徒の疑問・興味関心〉を可視化して共有することで、〈いいなと思った所・気になった所〉と《分からないところ》が重なっていて、そこに詩の魅力の要があるらしいことが発見できたこと。

○個人の読みと他者の読みが交流し、共有されることで読みがさらに深まり、詩の世界のさらに奥に（次の課題に）分け入っていく体験ができた。

（課題）

○詩を読む体験をさらに主体的に続けていけるようにする。

実践例『私の詩のアンソロジー』を作る

参加者アンケート：（自由記述）結果より 抜粋

～ 「他校の先生は本校の取り組みをどう見たか」 ～

3年1組「実践国語」の授業の参観者の感想

- ・ 詩の授業はずっとやったことがないので新鮮で興味深く見せていただきました。生徒たちが本
当にテキストに向き合って「読んでいた」ことに（失礼ながら）びっくりしました。私は、いつも
空回りです。どうすればテキストの内容に興味を持ってくれるのかうまくいったためしがありません。
一朝一夕にはできることではないと思いますが面白い授業でありがとうございました。「わ
からないこと」について私なら出ないとすぐにヒントや答えを言ってしまいましたがじっくり待
つのは参考になりました。生徒がどこに着目するかは、ある程度予定されているのでしょうか？
ゴールのようなもの（詩のテーマ）を設定し、そこに誘導していきたいような誘惑に駆られます。
- ・ 授業の雰囲気。先生がとても発言しやすい場を作っていた。生徒の積極的な発言が見られた。
- ・ 生徒の意見に対して否定することがない。
- ・ 生徒が気になったところから作品に取り組むことで、生徒中心の授業作りができるという点で
非常に参考になりました。付箋を使うことで視覚的興味を引くこともできることも参考になっ
た。

- ・ 生徒の自由な発言から詩の内容についての理解を深めるようなアプローチを行っていた。
- ・ 生徒のペースに合わせて授業を進めている。
- ・ 生徒のつぶやき、語りかけを丁寧に拾い上げている姿が印象的でした。
- ・ 生徒が自らわからないところ、面白いところを探すことの大切さに気づきました。
- ・ 非常に良く学びが起きていると感じました。
- ・ グループで学ぶ雰囲気がつけられていた。
- ・ 生徒の意見・意志を尊重する雰囲気（共有化）が図られていた。
- ・ グループに対して人数分のプリントを配るのではなく、1枚の紙を配布し、グループ全員で1つの課題をしっかりと取り組むことができていた。
- ・ 発問に対する回答が出なかった時に、すぐに教員側から答えを提示するのではなく、ヒントを出しながら考えさせて、粘り強く答えを引き出そうとしていた点。
- ・ できるだけ生徒の自由な発想をさせようとする工夫がみられた点。
- ・ 自由な読み、多様な読みが許容されていました。「こう読まねばならぬ」という理詰め授業ではない所に新鮮さを感じました。とても参考になりました。

生徒の実態に応じた「生徒中心の授業」の様々なアプローチの効果が、生徒の学ぶ姿に現れていることが、外来者の目を通して確認できた。

◎授業&取り組みについて

- ・ ペアとグループの編成の仕方。また、一斉授業の形式をとったほうがいい場合と少人数にしたほうがいい場合の使い分けを授業見学を通して考えられた。
- ・ 学力困難校が教室の中で起こったことから授業を作っているということ。（授業、クラス作り、生徒指導、進路指導がみな一体である）
- ・ グループ学習とアクティブラーニングの違いがわかったこと。
- ・ グループで話し合わせることにより授業中あまり発言しない生徒も発言しなければならない機会が増えると思うので参考になりました。
- ・ 生徒への励ましや温かい声かけ（学習意欲の低い生徒に対して）
- ・ 生徒との信頼が成立していることが、授業を通して感じられた。
- ・ 授業態度が良好でない生徒への指導（根気強く繰り返し行う）
- ・ 学習に対して積極的ではない生徒へのサポートを重視することで全員が関わることができる。
- ・ 少人数である方が目が行き届きよい。
- ・ 先生方が生徒に対してとても丁寧（姿勢、身のこなし、言葉遣い、声掛け）・温和に接しているらっしゃったこと。
- ・ 学校を変えて、すべての生徒にとっての居場所となる教室作りをしようという気概。
- ・ みな先生方がていねいに授業を行っており、生徒を一人も置き去りにしないという姿勢が素晴らしいと思った。
- ・ 新しい生徒観に立った授業研究という姿勢・取り組みを見習いたいと思います。
- ・ 教育的観察力、省察力を高めるという意識・認識もとても大切だと思います。
- ・ 他校との合同研修会を実施して、ステップアップサポートに取り組んでいることで、職員の意識の向上が図られると思った。
- ・ 課題を媒介して子供たちがつながっている姿が美しい。私も同感です。
- ・ 生徒が主体的に取り組める教材がたくさんあった。また生徒もその教材を真剣に学習していた。
- ・ 課題設定、グループ活動の方法等、クラスによりバリエーションがあり参考になりました。
- ・ 課題選択の重要性を学びました。
- ・ 生徒の互いに助け合う、意見を交換するといった活動を行うために、課題が生徒に適切なもの

であるため、授業を入念に準備することが大切だと思った。

- 生徒が発表しているときに周りの生徒がよく聞いていて、 演示実験が失敗すると「あー」といった残念がる声が多く上がっていた。授業の回数の中で、グループ個々の課題がクラス全体の課題になっているからこそ出てくる声だなと感じました。グループの課題をクラス全体で共有することの大切さを学びました。
- 多くのクラスでグループ学習が取り入れられていた。生徒は与えられた課題について意見交換をしながら「考える」という作業を行っていた。
- 協働で作業することが、効果的となる場面でグループになると、授業にメリハリが出てくるのだと感じました。50分の中で、学習内容に応じて、教室内の配置を変えられていく点が参考になりました。
- 生徒が主体的に学ぶ様子に感心いたしました。
- 生徒の多くが笑顔で授業を受けており、 学校生活が充実していることがわかった。
- 3年生の3学期のこの時期にしては、よく学習に取り組んでいるなどと思いました。
- 生徒がみな楽しそうに参加していた。
- 教師は teacher から facilitator になる時代が来たことを改めて感じました。進度評価やテストをどうするのかとすることが気になります。
- 4校時の数学ⅠⅡクラスのグループの形が同じだった。全体で取り組みがシェアされているのだと思う。生徒にとっても多くの授業で方針が変わらないということは、一つのメリットだと思う。
- 一斉からグループ（共同）学習へのメリハリが良かった。
- グループ学習の際、作業に必要なもの（色鉛筆等）を一人一つずつ配布し、作業がスムーズに進むようにしていた。私は生徒に用意させており、毎回忘れ物のせいで作業がスムーズに進まないのが、参考になりました。
- 書画カメラを使い、生徒が記入したプリントを全体で見ることができる。
- 1年単位の長い時間をかけてグループ学習が有意義になるように準備してきたこと。
- 3年間をかけて生徒の主体性を引き出すような指導を考えてこられた成果が伺えた。
- 毎年来るたびに生徒の姿が改善されていることを感じています。
- 1年生から3年生に進む間に学びの作法がしっかり定着しているということ。
- ねらいを明確化することで、生徒が学びやすくなる。
- 集団生活におけるルールの明確化をおこなう。

評価されたところ

- ビジョン：生徒の実態を丁寧に見取り、教室の生徒を一人も置き去りにしない
- 課題設定：子どもたちがつながる課題の設定
- 実践方法：学習内容に応じ教室内の配置を変化する。
- 生徒の学ぶ姿：楽しそうによく取り組む。主体的に学ぶ
- 積み重ね：1年、3年間の効果

○学校の取組全般について

- 校舎に入る前から多くの生徒さんが明るい表情で元気にあいさつしてくれました。寒い日でしたが、暖かい気持ちで研修させてもらいました。また、先生方がとても丁寧に生徒さんに対応されている様子を見て、自分を反省しました。今日は大変ありがとうございました。
- 自己肯定感の低い生徒を協働学習により学びに呼び戻したいと考えていました。本日の研究授業、研究協議を拝見させていただき、協働学習の力を改めて感じました。本日は貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。この学びを本校に持ち帰り、一人でも多くの教員と共有したいと思います。
- 学習や生活の上で課題の多い生徒に対して真剣にアプローチする先生方の姿に大変感銘を受

けました。生徒同士の学び合いを深めるのは容易なことではありませんが、参考に今後も努力していきたいと思えます。ありがとうございました。

- 学校全体で協働学習の推進に取り組んでいると感じました。本校でもできること、また、様々な課題についてもさらに考えていきたいと思えました。
- 他の学校の授業を拝見する機会というのはあまりありませんので、学校・生徒の実態に応じた指導法を勉強させていただくよい機会になりました。
- 生徒の実態、教員の個性に応じて授業作り（形態など）を行っていくことが大切であると感じた。

活動内容を公開したことの意義

- 本校での取り組みの姿勢・実践例が他校の授業改善に向けての一つの方向性を示し得たこと
- 他校との交流によりこれまでの実践を別の観点から振り返ることができた

○改善すべきこと

○課題設定・授業展開

- 社会で必要とされる力と受験学力との関係が難しい。昔から変わらぬ課題ですが、生徒の実態に応じたアクティブラーニングの変化球の引き出しをいかに指導者が多く持っているかということにも関連すると思えます。
- 難しい部分ではあるが指導者に必要な発言を拾いがちになってしまった。ズレの見られる発言はかなり軽く扱われていたと感じた。
- 全体として読みの指導は行わないのでしょうか。
- 正面に掲示した詩の文字がもう少し太いと見やすいと思う。
- 授業時間内に解決しない疑問が多いような気がします。
- 授業の目的等が明確になるように意識したほうが良い。
- 授業中に目標達成度を振り返るような場面があると良いと思った。
- 全体的な流れ等の説明があっても良い。それを考えることが主体的なのかもしれません。
- まわりの生徒としゃべってしまう生徒をグループ学習にどのように組み込ませるかが難しい。
- グループ学習の際、グループごとに取り組みの様子にバラつきが出てしまうこと。
- 指名の仕方を変えるとより良くなる可能性があります。
- 低学力生徒への保障（いかに共同学習に入ることができるか）
- 授業（本時の活動）で、何を身につけさせるか、明確にほしかった。
- グループの音読ではなく、教師の範読そして生徒に音読させる活動が欲しかった。
- 生徒の発表についても時間を決めても良かったのでは？
- 物理の理論的な裏付けはどの程度やるのかわからなかった。（利用する法則だけでなく、自由落下等での予想される物体の速度などを試算するなど）
- グループワークは時間設定をすべきだと感じた。
- 掲示用本文の行間に合わせて付箋を用意すべきでした。
- 付箋の色別の指示をもう少し早くすべきだと感じられました。
- 教員側が話して板書をしている時でも、グループ学習の形態で生徒が座っていたため、生徒の意識が黒板に向きにくくなっていた。（日本史A）
- 導入部分が長い。
- 「話し合い」を行うことが目的となっている不安を感じた。PDCAのサイクルで言えば、PDまでは見えたが、CAの部分が見えづらい。授業では「話し合い」はさせていた。しかし、他者の意見を交換して、より高次のものへと昇華することが目的の一つでもある。「主体性を持って学ぶ」ことは大切な要素ではあるが、「話し合い」だけで終わるのではなく、「意見を

まとめ、見つめ直す」といった作業が十分になされていることが、学びのプロセスの質を高めるために必要な要素だと考える。

- 詩なので、ハッキリした目標が示せるのかわかりませんが、…子どもにゴールが見えると、より安心して授業に取り組むと思いました。
- ”話す時間”は多かったが、プリントなどの“書く時間”がなかった。
- 受験で使わないとはいえ、この題材で25時間（3カ月以上）は時間を掛けすぎかなと感じました。PDCAを計画的に行えば、他の面白い題材を扱えるし、生徒も飽きずにできるかなと思います。力学以外にも、熱力学、電磁気学を絡めることができると面白そうです。（物理）
- 話し合いや発表などにルールや約束事があるのかが疑問であった。
- 書画カメラの使用ですが、鉛筆の薄さでは遠くから見えにくく。“動き”もないので、必要性があるのかな、とってしまいました。（物理）

指摘があった点

- ・ 課題と受験学力との関係
- ・ 授業の目標と振り返り
- ・ 活動時間の割り振り
- ・ 学びのプロセスの質を高める
- ・ 教材・教育機器の利用の仕方

○評価

- 評価が難しいと感じた。協議形式にして順位をつけたりすると生徒のやる気がさらに出る
- 実際にやってみないと様子がわからないので、教科内や学校全体で、先生方どうして、検討する時間があればよりよいものなるのではないかと思います。

検討を要する点

- ・ 評価方法：従来の評価方法の再検討。パフォーマンス評価、ポートフォリオによる評価などの研究
- ・ 職員の協働にもとづく評価

○教室環境など

- 机の上に漫画が出しっぱなしになっている生徒がいたので、授業に必要なものは机の上に出さないという指導をおこなった方が良いと思います。
- 4人グループが多かったが、4人でよいのか、また、グループをつくる必然性は。グループをつくるならば、それを活かすようにすべき。
- グループ活動時のメリハリの付け方（規律の確保）が難しいと感じた。各先生方とも工夫して取り組んでいると感じた。
- 良い授業でしたが、物理室の液晶テレビの置き方が気になりました。地震があっても落ちないようにしたい。
- 見学の先生が話しかけて、生徒の学びの邪魔になっている場面があったように感じ、もったいないと思いました。研究協議の中で、集まった先生方で見た感想や学びをシェアできる時間があると、参加した先生にも得るものが多くなったように感じました

指摘があった点

- ・ 授業規律
- ・ 教室の安全確保
- ・ 参観する際の配慮
- ・ 授業研究会での共有の場を設ける

7 今後の課題

- I 基礎学力定着のための授業改善の研究
- II 生徒の地平に立った新しい授業観にもとづく授業改善
- III 教師の協働によって「教育的観察力」「省察力」を高め、「主体的に学ぶ姿勢」を育てるために必要な《具体的実践的な支援の方略》

上記3年間の研究実践をふまえ、以下のビジョンのもとに、IIIの目標達成のための実践を継続発展させていく。

ビジョン：「一人残らず学びの権利を実現する」

- 具体的手立て：1) 授業公開週間、研究授業、授業研究協議会、教科研究会の定例化
2) 外部講師による支援
3) 「協働学習」をベースにした学校づくり

別添（参考資料）

- ・「よりよい授業実践&学年づくり」のために 2015.7.30
～「草津高校での三年間の授業実践と学年づくり」の実践を共にまなぶ～
- ・[研修会資料] 体育授業実践の概要（授業 VTR の文字起こしをしたものの一部分）
※協議会で生徒の学びを見取るために、VTR の映像と音声だけでなく、文字起こしされた「発話記録」を資料として使用。
- ・「桐西・安中総合合同授業研究協議会」
- ・職員向け広報資料 「まなびや」No.1～3
- ・第一回研究授業・授業研究協議会 1年編 2年編 3年編記録 2015. 5.13
- ・英語科指導案 [視学官訪問時] 平成27年12月7日（月）5校時
- ・数学科指導案 [視学官訪問時] 平成27年12月7日（月）6校時
- ・理科（物理）指導案 [公開研究時] 平成28年1月12日（月）5校時

(様式 7)

平成 27 年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進校（学校）】

番号	10	都道府県市名	群馬県
----	----	--------	-----

1 学校の概要

<生徒数・学級数(平成27年4月現在)>

学校名	群馬県立下仁田高等学校（ぐんまけんりつしもにたこうとうがっこう）				
学 年	1 年	2 年	3 年	計	教員数
学級数	2	2	2	6	22
生徒数	59	51	50	160	
学校のホームページアドレス		http://www.shimonita-hs.gsn.ed.jp			

2 推進校における学力に関する現状

本校は、群馬県西部の山間部に位置する 1 学年 2 クラスの小規模な普通科高校である。昭和 12 年に創立し、今年で 78 年目を迎える地域に根ざした伝統校でもある。しかし、近年は地元の過疎化・高齢化が進み、地域における子どもの数が激減し、5 年連続して募集定員を満たすことができない状態が続いている。地元出身の生徒数も、10 年前は全校生徒の 40% を超えていたが、今では 15% 程度まで減少している。県内の広範囲から生徒が集まるようになった現状に伴い、不登校経験のある生徒、低学力の生徒、ADHD・LD・アスペルガー・緘黙といった発達障害傾向の生徒、中学校で特別支援学級に所属した生徒等、様々な困難を抱えた生徒も在籍している。大多数の生徒は、義務教育段階の基礎学力が身に付いておらず、また学力の個人差も大きいため、教師たちは日々の授業に苦慮している。さらに、家庭での教育力不足による基本的な生活習慣の欠如、経済的困窮によるアルバイト従事者が多く家庭学習の習慣が身につかない等、学力の定着の阻害要因が山積している。ちなみに、過去 3 年間の入学者選抜学力検査の本校の平均点は、県全体の平均点の 1/2 にも満たない状況である。

一昨年度より本校では、前述した学習が困難であるという課題を解決する糸口として、本研究に取り組んでみようということになり、2 年間「学び合い学習・学び直し学習」を中心に実践研究を行った。その結果、「学び合い学習」については、過半数の生徒が肯定的に捉えており、継続して実施する必要性を感じる事ができた。また、「学び直し学習」についても、約 6 割の生徒が有用感を感じており、これを学力の定着に結びつけるいいチャンスにしたいと考えた。

その成果は確実に現れている。他の要因もあると思うが、「この2年間で生徒が落ち着いてきた」というのが本校教職員全体の声であり、数字の上でも欠席・遅刻・早退の減少、退学者・特別指導対象者の減少をもたらしている大きな要因の一つがこの取組であることに疑問の余地はない。

また、この2年間で不振科目数、仮進級者数も減少し、学力向上の傍証と判断できる。授業においても明るく生氣ある展開が常態となり、雰囲気が大変良い。ただし、学力向上の総合的な判定については、今年度の研究課題の大きな柱となる「形成的評価への習熟」を待ち、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の4観点を正確に評価することにより総括していきたい。

3 研究課題

下仁田高校に適合した学習法と評価の研究

～学び直し学習、学び合い学習の一般的理解から本校生徒に対する方法論と評価法の確立へ～

4 平成27年度の重点課題

- 各教科の年間計画の中に「学び直し」「学び合い」を位置づける。
- 各々で「学び直し」の具体的方法論をまとめ、確立する。
- 各々で「学び合い」の具体的方法論をまとめ、確立する。
- 生徒の「学び直し」「学び合い」を正確に評価するために、「形成的評価」に習熟する。

5 研究の具体的内容（検証の手立てを含んでもよい）

（1）校内学力向上研究委員会

調査研究を円滑に進捗させるため、今年度も昨年度に引き続き委員会を組織した。

回	実施日	内 容
第1回	5/11（月）	・校内組織について ・今年度の研究の進め方について
第2回	7/ 6（月）	・今年度の研究概要について ・先進校視察について
第3回	9/14（月）	・評価のあり方、方法について ・校内研修について
第4回	1/19（火）	・第3回推進協議会について ・研究のまとめ（タイムテーブル、係分担等）について

（2）校内研修

今年度は、これまでの取組である「学び直し」と「学び合い」についての更なる実践の推進ならびに研究の深化を図るため「アクティブラーニング」をテーマとした研修と、それらを正確に評価するための「形成的評価」についての研修を実施した。また、昨年同様、先進校視察

で得た情報について全体で共有し意見交換を行った。

回	実施日	研修テーマ	内 容
第1回	11/10(月)	「報告研修：県外指定校の 実践に学ぶ」	・先進校視察での視察内容の報告、意見交換 報告者：諸星 雅憲 「愛知県立加茂丘高等学校視察報告」 報告者：小林 拓也 「神奈川県立大楠高等学校視察報告」
第2回	12/ 8(火)	「学び合い授業による言語 活動の充実	・代表者による研究授業並びに授業研究 ・文部科学省視学官による指導助言と意見交換 指導助言者：文部科学省視学官 太田 光春 様 ：文部科学省教育課程課 小林 努 様
第3回	1/14(木)	「アクティブラーニング型 授業の意義・効果・始め 方」	・講義、模擬実践並びに意見交換 講師：産業能率大学経営学部教授 小林 昭文 先生
第4回	2/ 2(火)	「群馬県高校生ステップア ップサポート事業を理解す る」	・「群馬県高校生ステップアップサポート事 業」の理念を踏まえた研究授業 ・講義及び質疑 講師：群馬大学教育学部准教授 濱田 秀行 先生
第5回	2/25(火)	「形成的評価法の理論と実 践」	・講義並びに意見交換 講師：群馬大学教育学部准教授 濱田 秀行 先生

(3) 研究授業における各人の取組

これまでの取組の中で得た知見を生かし、今年度の授業の中でいかに実践するかを表現し、自ら問う場とする

実施日	教科・科目	授業者	内 容

5/18 (火)	地公・世A	教諭 杉山 明	学び合い・南アジア世界
5/28 (木)	数学・数Ⅱ	教諭 関端 寛	学び直し、学び合い・円の方程式
6/ 1 (月)	理科・生物	教諭 島田 具広	学び合い・生命と物質～細胞膜の性質～
6/ 9 (火)	数学・実数	教諭 高橋 真人	学び合い・素因数分解の利用
6/10 (水)	国語・現B	教諭 田島 慶一	学び合い・小説を読む
6/18 (木)	商業・情処	教諭 小池 清之	学び合い・関数を利用した表とグラフの作成
6/19 (金)	英語・コ英Ⅰ	教諭 榎本百合佳	学び合いを通じた基礎文法の学び直し
6/22 (月)	英語・コ英Ⅱ	教諭 諸星 雅憲	学び合い・英語で自分の意見を伝えるペアワーク
6/23 (火)	地公・現社	教諭 江黒真奈美	学び合い・はたらくこと、社会とかかわること
6/23 (火)	商業・情処	教諭 友松 浩司	学び合い・データの検索と抽出
6/23 (火)	保体・体育	教諭 斎藤 純也	全員が協力してクラスのチーム力を上げる
6/25 (木)	家庭・フード	教諭 小林 桃子	学び合い・調理の基礎技能の習得
6/25 (木)	保体・保健	教諭 横澤 皆美	学び合い・中高年期と健康
6/25 (木)	国語・国表	教諭 五十貝 勤	学び合い・メールか手紙か
6/25 (木)	英語・コ英Ⅱ	教諭 淡路 佳貴	学び合い・日本文化「マンガ」
6/26 (金)	数学・数A	教諭 小林 拓也	学び直し、学び合い・確率とその基本性質
6/26 (金)	国語・国総	教諭 齋藤 美和	学び合い・漢文の基礎知識
7/13 (月)	理科・物基	教諭 平川 哲也	学び合い・いろいろな力
7/15 (水)	音楽・音Ⅰ	教諭 大谷 邦子	学び合い・ギターの弾き語り挑戦

(4) 視察研修

昨年度に引き続き、県外2校の高等学校の視察研修を行った。視察先は、学力向上の施策として、主に学び直し、学び合いを取り入れている先進校に依頼した。テーマとした授業実践の参観や評価等について学校全体での組織的な取組状況等について話をうかがった。

視察先	愛知県立加茂丘高等学校	視察日	10/8(木)	視察者数	2名
<p>【報告概要】</p> <p>定員は、普通科120名で、1年次は1クラス30名の4クラス編制。2・3年次は1クラス40名の3クラス構成となっている。昨年度の卒業生の進路状況は4年制大学15名、短期大学3名、専門学校21名、就職44名であり、本校と類似した状況である。学力育成を積極的に推進しており、評価方法の改善についても力を入れている。</p> <p>研究2年目の動きとして、重点的に以下の事項に取り組んでいる。</p> <ul style="list-style-type: none">・中高接続<ul style="list-style-type: none">ア 近隣中学校教員との対談イ 中高教科会(国語)ブリッジ教材、授業展開ウ 出前授業(数学)エ 授業参観(英語、地歴公民)オ 公開授業の案内・協議・学力育成を下支えする校内体制<ul style="list-style-type: none">ア 履修カード制イ 「評価方法＝指導方法」の共通理解ウ 総合的な学習の時間見直し・授業改善(各教科)<ul style="list-style-type: none">教員の意識改革、生徒による授業アンケートの分析と改善報告、適切な観点別評価授業改善や評価について、さまざまな観点で組織的・継続的に取り組んでいる点が大変参考になった。					
視察先	神奈川県立大楠高等学校	視察日	10/9(金)	視察者数	2名
<p>【報告概要】</p> <p>全日制普通科1学年8学級編制(1年240名、2年220名、3年172名)。観点別評価について、すべての県立高校が平成19年度から実施しており、学力定着への取り組みも含め学ぶべきところが多くあると思われた。</p> <p>評価の仕方と学力定着へ向けて、重点的に以下の事項に取り組んでいる。</p> <ul style="list-style-type: none">・評価の仕方<ul style="list-style-type: none">ア 考査、小テスト、課題、平常点を観点別に評価イ アで配分された得点からA、B、Cの3段階で観点別に評価ウ 各観点に比重をかけ総合的に10段階で評価・学力定着への取り組み<ul style="list-style-type: none">ア 1クラス30名編制イ TT授業、廊下当番ウ 学び直しにより達成感を与えるエ 50分間での授業の流れを明示オ 毎回、授業の振り返りカ ジャンプの課題					

評価については、生徒の長所と改善点を知るための評価、説明責任をしっかりとできる評価を行っていることが大変参考になった。

(5) 検証の手立て

25年度より実施している「下仁田高校 学習自己評価カード」により、今年度も生徒に対してアンケートを実施した。25年度からの年次比較により研究の成果を検証した。

下仁田高校 学習自己評価カード											
教科名 () 科目名 () () 年 () 組 () 番 () コース・氏名 ()											
I. 目的・・・このカードは、1学期と2学期のそれぞれの学期ごとに、自分の授業への参加の様子や学習に取り組んだ姿勢について自分の成長したところや反省するところなどを振り返ること、先生と生徒が協力してよりよい授業づくりに役立てることを目的として活用するカードです。											
II. 記入の仕方・・・1～15の各項目ごとに、それぞれの学期全体の自分の様子を考えて、そう思う評価点の1～5に○印を付けてください。その後、各縦の合計点を出して、さらに各学期ごとに総合合計点を集計してください。											
項目	1学期について(実施日 月 日)					2学期について(実施日 月 日)					比較
1 忘れ物をせずに授業の準備をすることができたか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
2 いねむりや私語をせず、授業に取り組めたか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
3 先生の話をしっかり聞くことができたか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
4 先生の発問に、よく考えて答えることができたか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
5 プリントなどの課題や実技・実験・実習などには、真剣に取り組めたか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
6 授業規律違反で注意されることはなかったか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
7 宿題や課題は期限を守って提出することが出来たか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
8 家庭学習をする時間が多くなったか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
9 授業の進み方はちょうどよいか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
10 先生の説明や発問は、わかりやすいか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
11 先生は、生徒の発言や反応を大切にしているか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
12 近くの人と相談したり、グループやペアで活動することはどう思うか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
13 授業中に基礎基本の復習をすることは役立っているか。(役立っていると思うか。)	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
14 授業の内容が理解できるようになったか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
15 授業を楽しく感じられるようになったか。	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	たいへん悪かった	悪かった	ふつうだった	良かった	大変良かった	
縦の合計点											
総合合計点											
III. 自分の学習の状態で特に良かったことや反省すること、授業への要望や感じたことなどがあれば右の枠内に記入してください。											
1学期					2学期						

ポイントが上
がった項目
は○印を、
変わらない
項目は△印
を、下がった
項目は×印
を記入する。

6 研究の成果

(1) 取組内容と成果、学習評価の工夫・方法

ア 国語科

【内容】

- 3年現代文 グループワーク
- 国語表現 自己表現力の向上についての試み
- 古典読解 学び直し、グループによる本文読み合わせ
- 2年現代文 グループワーク
- 古典A 漢詩の白文読みについての試み
- 基礎国語 学び直し、グループによる本文読み合わせ
- 1年国語総合 漢文の訓読文・白文読み

【成果】

- 3年現代文 グループで登場人物の経歴をまとめさせた。現代文が苦手な生徒を得意な生徒がフォローしている姿がみられた。
- 国語表現 表現の実践単元で、それぞれの発表の様子の録画をみて、長所短所を指摘し合い、自分の発表の仕方の改善につなげさせた。
- 古典読解 古典文法を一つひとつしっかりと取り上げ、グループで巻末の一覧表で意味や活用を調べさせた。本文は個人やグループなどで何度も読み合わ

せを実施した。ともに生徒の理解が深まった感がある。

- 2年現代文 評論文、小説ともにグループワークによる内容読解、心情把握に取り組んだ。最初はぎこちない感じはあったが、回数を行ううちに話し合いも充実し、発展的な討議、意見発表ができるようになった。
- 古典A 二人ペアで漢詩を読み合う。読めないところは教え合わせた。意欲的に取り組む生徒が多かった。最終的にほぼ全員が読めるようになった。
- 基礎国語 教科書の漢字の読み仮名ふりを徹底的に行った。本文の読み合わせをグループで行うことで、全体的に読めない漢字や言葉の意味の理解が深まった。
- 1年国語総合 訓読文・白文をペアで読み合ったり、音読テストを行ったりした。ペアで教えあっている様子が見られ、ほぼ全員の生徒が訓読文はすらすら読めるようになった。白文で読めるようになった生徒も何名かいた。

【学習評価】

- 3年現代文 机間指導を行い、作業に取り組んでいるか確認した。発問を通して登場人物の経歴が理解できているか確認した。
- 国語表現 録画を一人について複数回行うことで、回数を追うごとに表現力が向上しているかを確認した。
- 古典読解 机間指導により話し合いの様子を観察し、発表させることで内容理解と発表態度、聞く態度を確認した。
- 2年現代文 机間指導によりグループワークの進捗状況を確認した。また、グループごとの発表を通してグループ内理解につなげ、まとめにおいて個人の理解度を確認した。
- 古典A 最終的には生徒一人一人の読みを教師が確認した。
- 基礎国語 本文読み合わせを行った後に音読させることで、漢字の読みができているか確認した。
- 1年国語総合 音読テストを行い、間違えずに読めているか確認した。

イ 地歴公民科

【内容】

- 2年世界史A・3年日本史A

その時間の授業の課題を設定し「学び合い」学習で考えさせるようにした。個人の意見、班の意見を発表させ、授業で解決していく形をとった。

- 1年地理A・3年現代社会

「学び合い」において、「答え」にたどり着くまでの過程が伝わるような班の意見のまとめ方・発表の仕方について

【成果】

- 2年世界史A・3年日本史A

具体的には、4人1班で男女を2人ずつを原則に、交代で記録係を1人決め、班ご

とに話し合いをさせ、班の意見を一つにまとめさせて代表者に発表させた。その際、他の班から自由に質問をしてもらい、生徒同士で話し合わせた。

○1年地理A・3年現代社会

「学び合い」の結果出た「答え」をホワイトボードに書かせるという方式だけでなく、イメージマップを模造紙（半分に切ったもの）に書かせる方式も授業に取り入れ、問題によって使い分けた。イメージマップを使用した場合、まとめることに注力しなくて良い分、意見が出やすくなるという成果が出た。

【学習評価】

○評価点で成績をつける。

1・2学期それぞれ100点満点の評価点。3学期は1・2学期の評価点に3学の評価点も加えて100点満点の評価点。

- 関心・意欲・態度 25点 授業出欠席点5点、授業態度が20点で加点。
- 思考・判断 25点 授業プリントの課題を評価し加点。
- 資料活用の技能・表現 20点 ビデオをみて課題プリントを評価し加点。
- 知識・理解 30点 まとめプリント10点分、考査の得点を20点分に換算。

ウ 数学科

【内容】

○グループ学習

- ・4～5人でグループを作成した。各班にリーダーとなることができる生徒を1名ずつ配置し、その他の生徒はくじにより班編制を行った。
- ・新しい例題に対しても、教師が必要以上に説明せず、生徒の発言から例題の解答作成を行った。

【成果】

- 班を編制した当初は班内での相談が活発にされなかったが、回数を重ねることによって活性化することができた。
- 居眠りをしてしまう生徒等の取組が大幅に改善された。
- 自ら質問をすることがあまりできない生徒も、グループの座席になると質問するなど積極的に取り組めた。
- 問題演習の場面では活発に相談が行われ、学習内容の定着に繋がった。

【学習評価】

○考査など学習内容の定着状況に応じて評価を行った。

エ 理科

【内容】

○実験・観察におけるグループ学習

【成果】

○グループ内での役割分担の明確化に取り組んだ。例えば、実験器具・用具の準備や片付け、実験者の順番、結果の整理と記録、まとめ、発表者の選定等についてグループ内で話し合っ決めて決めた。中心になる生徒もあられ、グループごとの特性に応じたま

とめや発表を行った。

【学習評価】

○「関心・意欲・態度」と「観察・実験の技能」に関し、各班で積極的に取り組んだ生徒や発表を行った生徒を記録して加点するとともに、提出レポートの考察内容等を4段階で評価した。

オ 保健体育科

【内容】

○体育

バレーボール・バスケットボールでグループ活動を行った。チームリーダーを担当教諭が指名し、まずは、チーム編成から話し合わせた。また、リーグ戦に向けての練習内容を各チームごとに工夫させ、運営・進行も生徒同士で協力して行った。

○保健

「医療サービスとその活用」「環境汚染を防ぐ取組」でグループ学習を実施した。それぞれテーマを与え、それについてブレインストーミングを行い、意見をまとめ、発表する形をとった。

【成果】

○体育

自分たちで話し合って決めたチームなので、中心となる生徒が苦手な生徒に教える姿が多く見られた。また、勝つための課題をみんなで話し合い、練習内容にも工夫が見られ、ミスが起こっても、チーム内で肯定的な声掛けができるようになった。

○保健

具体的に進行方法を指示しなくても、生徒たちが自主的に話し合いを進めた。どんな発言をしても否定されない雰囲気の中で、活発に意見交換することができた。発表の際には、同じ意見が出る班も多くあったが、違う意見が出されたときに興味深く聞いている様子が見えた。また、生活への振り返りになり、今後自分たちがどうしていくべきかを考えるきっかけになった旨の内容を、まとめのプリント学習で記述している生徒がいた。

【学習評価】

○体育

グループ活動後の振り返り、次時への課題を話し合わせるようにした。また、見つかった課題に対する練習方法をグループで考えさせた。

○保健

担当教諭が、他の班とは違う意見が出たときにそれを取り上げ、気付かせる支援を行った。また、グループ学習後にポイントをまとめるプリント学習を行った。

カ 音楽科

【内容】

○イタリア歌曲「Caro mio ben」の教材を用いて歌詞の内容と旋律の関係を知覚・感受し、豊かな表現で自分なりに工夫して表現しながら歌う。

【成果】

○各グループ5名～6名の班になって自由に話し合えるようにした。また、楽譜も、自分の思ったことを直接書き込めるようなワークシートを作成した。一人では恥ずかしくてなかなか感情を込めて歌うことができなかった生徒も、同じ班のメンバーと一緒に自分なりの歌い方で表現することができた。

【学習評価】

○歌唱活動だけでなく、歌詞とフレーズの間隔を自分なりに考え、班のメンバーと共有しあったり、自分と異なる意見も聞きながら歌い方を工夫している姿勢も評価の対象とした。

キ 英語科

【内容】

○協働で活動する時間を増やす。

新出語句や文法事項を定着させる活動、教科書の内容をまとめる活動などをペアやグループで行う。

○基本的な会話を授業の最初に行う。

中学で学んだ文法事項や語彙を取り入れて学び直しを行う。

○授業の最後にその日に学習したことを振り返る時間を設ける。

教師が用意したワークシートの質問で授業の理解度と自分の授業態度を振り返らせる。また、簡単な確認テストを行う。

【成果】

○新出語句をカードゲームの活動を通して練習した。生徒は興味を持って活動に取り組み、この方式を試した課の語彙の定着は発音と意味確認だけの練習の課よりも良好であった。ペアやグループ活動を増やすことで、生徒が教員が答えを示すのを待つ姿勢から脱却し、自分で考え、パートナーが困っていれば援助をするような学習態度へ変えていくきっかけをつくることができた。

○日常会話で使われるような表現の中から基本的なものをまとめたプリントを配布し、ペアになって練習する。毎時間継続することで、英語で話したり聞いたりすることに慣れることができた。高校の教科書で新しい語彙や文法を学習する際にもこの活動で復習した表現が役に立つことがあった。

○自分の学習態度とその日の学習事項がどの程度理解できたかを自己評価した。記憶が新しいうちに振り返ることで、以前よりも新出事項が定着したと考えられる。また、簡単な確認テストで達成感を感じさせることもできた。

【学習評価】

○新出の文法事項を練習するペアワークやグループワークでは、ワークシートを使用した。まずは、口頭で言えるように練習し、それから協働作業を行い、その後新出表現を使って文をまとめさせた。

○授業の最後に行う確認テストでは、全員が満点を取れることを目標に問題を作成し、その結果も評価に加えた。

○読み書きだけでなく、「話す」「聞く」の能力も評価するため面接テストを導入した。

ク 家庭科

【内容】

○食物調理技術検定を授業内で実施した。個人でなく、グループによる課題・目標達成ができるように設定した。

【成果】

○検定全員合格という目標に向け、ペアワーク・グループワークを実施した。全員がルールや合格ラインを把握した上で、タイム計測や評価、審査など、本番同様の行程を生徒同士で取り組めるようにした。指導側の支援は、役割分担や時間配分を明確にしたり、生徒でも簡単に評価が行えるよう目測で評価が行えるシートを作成したりした。何がどのように評価されるのか、生徒が互いの実技を見て学べたので、実技能力の高い生徒を筆頭に、全員が力を伸ばすことができた。

【学習評価】

○「きゅうりを2ミリ以下の半月切りにする（30秒以内）」という課題では、厚さの計測と枚数を並べ数えられるシートを作成し、切ったものをペアで評価させた。単純な枚数の記録だけでなく、評価し合う過程を観察した。また、「2品の献立作成」という課題では、前半後半と2組に分け、お互いの作業行程を観察させた。生徒同士に質疑応答をさせ、その後の調理計画に改善や工夫が見られるか観察した。

ケ 商業科

【内容】

○課題解決学習・学び合いを中心に表計算の関数の使い方や文書作成の仕方ができた生徒が、他の生徒を指導するようにした。

【成果】

○担当教員が中間モニターで新しい関数の使い方や文書作成の仕方を全体に説明し、実際に問いを解いてみせる。その後、類似問題を提示し完成を目指す。その中で関数の使い方や文書作成の仕方が分からない生徒は、分かる生徒に質問ができるようになった。

【学習評価】

○他の生徒に教えられた場合には、普段点をアップさせた。

(2) 学習自己評価カードの結果分析について

①学習環境について

・(質問6) 授業規律違反で注意されることはなかったか。

	4 : 良い または 5 : 大変良い と回答		
	25年度(12月)	26年度(12月)	27年度(12月)
1年	80.8%	63.0%	80.7%
2年アドバンスコース	79.8%	78.7%	72.1%
2年ビジネスコース	76.5%	73.0%	66.2%
2年カルチャーコース	74.3%	74.5%	66.6%

3年アドバンスコース	76.1%	76.0%	80.0%
3年ビジネスコース	40.0%	80.8%	78.6%
3年カルチャーコース	60.0%	62.6%	78.6%
平均	69.5%	72.7%	74.7%

(評価) 本校は以前、生活面で指導を受ける生徒が多く、授業を行う上でも支障が多かった。

そこで平成24年度に生徒指導部と教務部が中心となり、全校をあげて授業規律の確保に取り組んだ。徐々に指導の効果が現れ、安定した授業が展開されるようになった。「学び直し学習」や「学び合い学習」を推進し、学力の向上・定着を目指す上で、学習環境が整っていることが最も重要である。25年度以降安定した学習環境が確保されていると評価することができる。今後も引き続き、全体で指導を継続することが必要である。

②課題学習・家庭学習

- ・(質問7) 宿題や課題は期限を守って提出することができたか。

	4:良い または 5:大変良い と回答		
	25年度(12月)	26年度(12月)	27年度(12月)
1年	83.0%	58.2%	76.5%
2年アドバンスコース	73.4%	76.0%	73.1%
2年ビジネスコース	75.4%	68.5%	61.4%
2年カルチャーコース	62.9%	81.4%	72.6%
3年アドバンスコース	64.2%	79.0%	80.0%
3年ビジネスコース	40.0%	81.7%	67.4%
3年カルチャーコース	80.0%	63.6%	90.6%
平均	68.4%	72.6%	74.5%

- ・(質問8) 宿題や課題は期限を守って提出することができたか。

	4:良い または 5:大変良い と回答		
	25年度(12月)	26年度(12月)	27年度(12月)
1年	42.1%	41.0%	40.5%
2年アドバンスコース	32.1%	57.4%	50.0%
2年ビジネスコース	26.9%	28.1%	45.7%
2年カルチャーコース	28.9%	47.7%	45.1%
3年アドバンスコース	32.8%	36.0%	56.0%
3年ビジネスコース	9.1%	39.1%	33.7%
3年カルチャーコース	41.0%	36.4%	38.6%
平均	30.4%	40.8%	44.2%

(評価) 「課題学習」については、だいたいの生徒が期限を守って提出できるようになっていることは評価できる。内容や量について深く検討した結果であると思われる。しかし「家

「家庭学習」の習慣については、若干の伸びはあるが依然として低い状態である。元々、義務教育段階から家庭での学習が習慣化していない状態が原因であると考えられる。効果的な家庭学習を促す課題の設定が必要であるとする。

③学び直し学習について

- ・(質問13) 授業中に基礎基本の復習をすることは役に立っているか。

	4：良い または 5：大変良い と回答		
	25年度(12月)	26年度(12月)	27年度(12月)
1年	77.2%	67.3%	76.1%
2年アドバンスコース	70.1%	76.0%	80.7%
2年ビジネスコース	63.1%	56.2%	67.5%
2年カルチャーコース	69.1%	70.9%	66.7%
3年アドバンスコース	61.2%	59.0%	66.7%
3年ビジネスコース	38.2%	65.2%	50.6%
3年カルチャーコース	65.0%	51.6%	82.7%
平均	63.4%	63.7%	70.1%

(評価) 約6割から7割の生徒が役に立っていると感じていることは、評価できる。基礎基本を充実させ、学力向上を望む生徒が多いことがわかる。しかし、一方で思うように力を発揮できず、劣等感を抱える生徒も多い。いかにして学力を身につけさせ、自己肯定感の向上を図り、学校生活の質を向上させていくか、多くの観点から取り組むべき課題も多い。

④学び合い学習について

- ・(質問12) 近くの人と相談したり、グループやペアで活動することはどう思うか。

	4：良い または 5：大変良い と回答		
	25年度(12月)	26年度(12月)	27年度(12月)
1年	68.5%	60.6%	72.9%
2年アドバンスコース	50.5%	61.3%	73.1%
2年ビジネスコース	60.5%	56.2%	59.0%
2年カルチャーコース	72.1%	68.6%	60.8%
3年アドバンスコース	47.8%	45.0%	70.6%
3年ビジネスコース	45.4%	66.1%	53.4%
3年カルチャーコース	47.5%	62.6%	85.3%
平均	56.0%	60.1%	67.9%

(評価) 「学び合い学習」については、半数以上が肯定的に感じている。学力の定着や伸長を目的としたグループ学習やペア学習などが年度がすすむにつれて生徒に受け入れられてきていることは、評価できる。しかし、発達障害を抱えている生徒や他者とのコミュニケーションを極度に嫌がる生徒もあり、今後も、いかに指導内容や方法を改善すればよいか総括を行い、本校生徒の実態に即した形にしていくことが重要である。

(3) 学校の変容

	24年度	25年度	26年度	27年度
欠席者	日数：1276 欠席率：3.3%	日数：1633 欠席率：5.1%	日数：1447 欠席率：4.2%	日数：965 欠席率：3.4%
遅刻者	日数：962 遅刻率：2.5%	日数：582 遅刻率：1.9%	日数：599 遅刻率：1.8%	日数：468 遅刻率：1.7%
特別指導	50人	37人	11人	4人
退学者	15人	10人	4人	2人
成績不振者	5人	6人	3人	

※27年度については、2月末現在のものである。

(評価) 平成24年度に生徒指導部と教務部が中心となり、全校をあげて授業規律の確保に取り組んだ。徐々に指導の効果が現れ、安定した授業が展開されるようになった25年度から文部科学省の指定研究を始めた。学校全体で学力の向上・定着を目指し、授業改善を進めていくなかで、いろいろな面において効果が現れてきた。欠席率や遅刻率についても徐々に改善傾向にあるが、長期欠席者（連続または断続して30日以上欠席）は依然として5人前後で推移しており、粘り強い指導を継続している。生活面で特別指導を受ける生徒は、大幅に減少した。安定した学習環境が保持されており、生徒は落ち着いて学習活動に取り組めるようになった。それが退学者数や成績不振者（学年末原級留置者）の減少といった効果をもたらすことになった。

7 今後の課題

(1) 下仁田高校における「学び直し」「学び合い」

・「学び直し」…昨年度のさまざまな研究実践を経て、各教科で「本校生のための学び直し」という共通認識ができた。本校では入学時において特に学力差が大きく、かつ本校に上位で入学してくる者も中学校の指導内容のかなり多くの部分を身に付けていない。また、下位で入学してきた者のうち特別支援学級に在籍していた者、不登校だった者は、高校入学時に期待される学習内容を身に付けていないだけでなく、四則演算や簡単な漢字の読み書きにまで遡る必要もある。そうした現状を踏まえ、1年生に対し教科ごとに年間計画に「学び直し」を位置づけて実施することとなった。

・「学び合い」…「研究課題」にも示したとおり概ね昨年度は一般論を学び、今年度はそれを本校生徒向けに調整するという方向性であった。したがって昨年度末の計画立案段階でその点を踏まえ各教科で創意工夫を加え実践した結果、大いに見るべきものがあったと思われる。

・「学び直し」「学び合い」共に、今後はC（チェック）とA（アクション）により、改善を加える。

(2) 学習活動の評価

・一斉講義式の授業から脱却して生徒の活動を重視する「学び合い」の中でグループ活動を行うようになると、当然その活動を評価する必要が生ずると考え、今年度は「学習評価」の研究にも取り組むこととなった。評価に関しては、大まかな枠組はあるものの、従来各教科で

- 独自に行ってきた経緯から、評価観も実際の評価活動も各教科によりまちまちである状況からスタートした。年度当初、各教科に評価法の研究を依頼するしつつ、予定では第1学期中に外部講師を招いての職員研修を計画したが、諸般の事情で実施できなかった。2学期の先進校視察で他県の様子を知り、伝達講習を行い、3学期にようやく外部講師を招いての職員研修を実施した。今年度の成果を基とした年度末総括を実施、来年度に活かすこととなった。
- ・今年度の各教科の研究は、不十分ながら見るべき点もある。ほとんどの教科で定期テスト以外の生徒の活動を評価に取り入れており、教科によっては観点ごとに評価項目を整理している。また英語科では「話す・聞く」の評価にも踏み込んで「面接テスト」を実施したり、口頭での運用能力を測定する「パフォーマンステスト」も検討している。
 - ・今年度、「評価法の確立」には至らなかったが、来年度「確立」できる糸口は掴めた。

8 その他

(1) 文部科学省初等中等局視学官来校について

- 1 日時・場所 平成27年12月8日(火) 10:55～
- 2 来校者 太田 光春(初等中等教育局視学官)
小林 努(初等中等教育局教育課程課課長補佐)
高橋 章(群馬県教育委員会高校教育課指導主事)

3 日程

(1) 研究授業

	3限 10:55～11:45	4限 11:55～12:45
学年・クラス	2年アドバンスコース	3年アドバンスコース
教科・科目	数学・数学Ⅱ	英語・コミュニケーション英語Ⅱ
授業者	小林 拓也	諸星 雅憲
教室	2年学習室	3年学習室

(2) 研究協議 13:30～15:00 会議室

- 次 第
- 1 あいさつ ・校長
・教育委員会
 - 2 学校の取組(授業実践、研究推進等)の説明
 - 3 群馬県教育委員会の取組(支援、普及等)の説明
 - 4 授業者からの説明
 - 5 文部科学省による指導助言
 - 6 意見交換

(2) 平成27年度群馬県高校生ステップアップサポート事業第3回推進協議会について

- 1 日時・場所 平成28年2月2日(火) 12:50～16:20
- 2 来訪者 濱田 秀行(群馬大学教育学部准教授)
佐田 穰太郎(群馬県立桐生西高等学校長)
武井 一茂(群馬県立前橋西高等学校長)

野村 聡 (群馬県立桐生女子高等学校長)
町田 仁 (群馬県立藤岡中央高等学校長)
山口 政夫 (群馬県教育委員会高校教育課長)
齋藤 利昭 (群馬県教育委員会高校教育課補佐)
丸橋 覚 (群馬県教育委員会高校教育課補佐)
高橋 章 (群馬県教育委員会高校教育課指導主事)
県内各高校教諭 計70名

3 日程

(1) 授業公開 12:55~13:45 (1~3年全クラス)

(2) 研究授業 13:55~14:45

クラス	2年アドバンスコース	1年2組
科目	数学Ⅱ	コミュニケーション英語Ⅰ
教諭	小林 拓也	諸星 雅憲
場所	合併教室	美術教室

(3) 研究協議 15:00~16:20 (4階視聴覚教室)

- 1 あいさつ及び来賓紹介
- 2 学校の取組
- 3 授業者より
- 4 研究協議(質疑応答)
- 5 指導助言・講評
- 6 謝辞